

第1 テモテへの手紙2章をお開き下さい。テモテへの手紙第1、第2、そしてテトスへの手紙は、新約聖書では牧会書簡というものに分類されています。牧会というのは、牧師の仕事のことを特に指します。最近の神学校では、入学してくる生徒は“牧会”という言葉すら知らないと聞きます。ビックリしますが、皆さんは“牧会”という言葉をもう知っていると思いますから。でも神学校に入学する神学生、彼らは“牧会”という言葉すら知らずに入ってくるという。それを聞いた時、私もビックリしましたけれども。でも、それほど牧師という仕事、牧師という存在がどういうものなのか、聖書からあまり教えられていないということが言えると思います。教会でそれはしっかり教えられなければいけないと思います。ですから今から若い牧師テモテに老練の熟練した牧師でもあった、大先輩でもあったパウロが最期に、その生涯の終わりに、最期のメッセージとして遺言のように書き残したのが、このテモテへの手紙であります。

第1 テモテ 2:1に早速目を留めて頂きたいと思います。『**そこで、まず初めに、このことを勧めます。**』“**そこで**”という言葉が注目に値します。先週皆さんにお伝えしたこの手紙のアウトラインを思い出して頂きたいと思います。1章は教会とそのメッセージ。2章・3章は教会とそのメンバー。4章は教会とそのミニスター。ミニスターというのが“聖職者”若しくはプロテスタントでは“教役者”という教会指導者・牧師のことです。5章・6章は教会とそのミニストリーというのがアウトラインでありました。もう一度言いますと、1章は教会とそのメッセージ。これが牧師としての第1の働きです。御言葉を取り次ぐ。御言葉を解き明かす。御言葉によって教会員・羊たちを養い育てること。これが羊飼い・牧師としての第1の任務であります。で、2章・3章、今日から2章に入るわけですからアウトラインは『教会とそのメンバー』です。全部“M”で来ています。Message, Member, 4章は“Minister”。“Minister”(ミニスター)は直訳すると『仕える者・しもべ』です。牧師は人に仕えられる者ではなくて、人に仕える者であります。なぜならば私たちの大牧者イエス・キリストが「**人の子は人に仕えられるためではなく、仕えるためにこの世に来られた。**」と宣言しておられるからであります。牧師は主と、その主の民に仕える者であります。ですから、牧師はしもべの中のしもべ、偉ぶっている者ではありません。教会のかしらはイエス・キリストであって、牧師は教会のかしらではなく、しもべであります。先生と平信徒なんて関係は、本来あってはいけません。で、5章・6章は教会とそのミニストリー。これはまだ先の話になりますからアウトラインだけ思い出して下さい。2章からは『教会とそのメンバー』です。“**そこで**”という言葉を出して頂いて、1章の内容を受けての話です。1章の内容は『教会とそのメッセージ』。これを受けて“**そこで**”というのが2章です。今からメンバーの話になります。メッセージを聞いた^{よそごと}ら、メンバーはそれに応えなくてはならないということです。聞きっぱなし、聞き流す、他人事のように思うとか、または右から左へ抜けて忘れてしまう、ではなくて、メッセージを聞いた^{よそごと}らメンバーはしっかりとそれを自分に当てはめ、人にではなく、あの人のための話ではなく、自分自身に当てはめ、そして自分が先ずは主の前にへりくだって、主に対して応答するわけです。適用するわけです。応用するわけであります。“**そこで**”の原語はギリシャ語で“oun”(ウン)と言います。その“ウン”という意味は、『そこで』という意味以外には『それゆえ』というふうに訳されます。“それゆえ”、1章の内容のゆえにです。教会はそのメッセージに応え、メッセージに沿うものでなければいけない。これが“メンバー”です。ただ教会の名簿に登録されているのが“メンバー”じゃないんです。MGFのメンバーは、MGFのメッセージに応える者。そのMGFのメッセージに沿う者でなければいけません。MGFのメンバーを見れば、MGFのメッセージがどんなものか、

誰にもよく分かるものでなければいけないということです。メッセージとメンバーが乖離^{かいり}してはなりません。かけ離れてはなりません。メッセージとメンバーは切っても切り離せないものだということです。決してメッセージに反するメンバーであってはなりません。このメッセージに反するメンバーであったのが**第1テモテ1:20**に名指しで指弾^{しだん}されているヒメナオとアレキサンデルという者でした。そこにヒメナオとアレキサンデルの2名の名前が出ています。彼らは違った教えをもって教会を攪乱^{かくらん}していたんです。違った教え。これは**第1テモテ1:3**に「ある人たちが違った教えを説いたり、」とあります。パウロとは違った教えを説く。パウロとは違ったメッセージを説く。そしてパウロのメッセージとは違うメンバーが生じてきたわけです。彼らは教会、すなわちテモテの牧会していた教会はエペソの教会です。これは**1章3節**にあります。テモテはパウロの後を継いで、パウロに任されてエペソ教会の若き牧師に任命されたわけです。でもその牧会を妨害する者たちがいたわけです。それがヒメナオとアレキサンデル。彼らはパウロとは違ったメッセージを語っていたわけです。テモテはパウロと全く同じメッセージを語っていたんですけども、人々はどうもパウロの古めかしいメッセージよりもヒメナオやアレキサンデルの真新しい、珍しい、流行りのメッセージに心惹かれていったわけです。分裂・分派がそこに生じていったわけです。そこでテモテは行き詰まっていたんです。そのテモテに対してパウロが励ます目的でこの手紙を書いたわけです。教会の秩序は乱れに乱れきっていました。若き牧師には荷が重かったわけです。それでも苦慮しているテモテに対して「あなたはしっかりと立ちなさい。」それが1章のメッセージでもありました。そこで2章が続くわけです。「そこで」という言葉。若しくは「それゆえ」という言葉。ギリシャ語の”oun”（ウン）という言葉。これは見逃してはならない言葉です。すべては神の靈感によって書かれています。一言一言、神の靈感がそこに見られますから軽んじてはいけません。

続いて、“まず初めに”という言葉が、これも大事であります。何をおいても、何はさておき、**まず初めに**、このことを勧めます。『このこと』とは何か。それは『すべての人のために』祈りなさいということです。『すべての人のために、また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。』一言で言えば、祈りのミニストリー。これが教会のメンバーとして最優先されるべき働きである、メンバーの本分である、職務であると言っているわけです。MGFのメンバーとして先ずなすべき事。それはやはり祈りであります。最初の教会、初代教会、原始教会。それはエルサレムでスタートしました。そのエルサレム教会も祈りでスタートしたんです。10日間、缶詰状態でエルサレムで120名のキリストの弟子たちが祈っていたんです。で、10日目すなわちペンテコステの日、五旬節、七週の祭りのその日に聖霊が下って、教会が産声を上げたわけです。教会は祈りによって、祈り会から生まれたわけです。ですから、これがまず初めに教会がなすべき事であります。エバン・ロバーツという有名な伝道者・リバイバリストがこう言っています。「**祈りは必ず行動に先立たなければなりません。さもないと悪魔があなたの機先^{きせん}を制するでしょう。**」祈りは必ず行動に先立たなければいけない。先ずは祈るということ。祈る前にことを始めてはいけないということです。祈る前にことを始めたら、悪魔があなたの機先を制してしまう。これは誘惑です。私たちは「祈っている暇なんかない。祈ってる時間なんてない。すぐに行動しなければ。」と思って、祈ることを後回しにします。先に計画をしてから、後から「神様、祝福して下さい。」と祈ります。そうであってはいけないと言っているわけです。

で、**1節**のところには“祈り”という言葉がいくつかのボキャブラリー（語彙）で表現されています。先ずは“願い”、そして“祈り”、“とりなし”、“感謝”と4つの単語が使われています。それぞれには勿論違いがあるわけです。いわゆる祈りの中にこの4つの要素も私たちは意識しなくてはなりません。

“願う”というのは単純なこと、“嘆願する”ということです。多くの人の祈りは“願い”で占められてしまっているかもしれません。でも祈りは“願い”だけではないということです。神様にお願い事をする。これが祈りじゃないんです。それも含まれていますけれども、それがすべてじゃないんです。でも、

“願い”が真っ先にきています。願っていいんです。『求めなさい。そうすれば与えられます。捜しなさい。そうすれば見つかります。たたきなさい。そうすれば開かれます。』イエスの約束があります。願うならば、主に願って欲しいと思います。人にではなくて、先ずは主に対して願うということ。

で、“祈り”というのは単純に神様と会話をするということです。神との対話。これが祈りです。神とのコミュニケーション。これが祈りです。願い事することがコミュニケーションじゃないんです。もし願い事だけでコミュニケーションがなされるならば、そのようなコミュニケーションは薄っぺらいものであり、また非常に不健全なもの、歪んだものであろうかと思います。コミュニケーションは願い事で成立するものではありません。お話することです。神様の語りかけを聞き、それに対して応答する。これが祈りであります。

“とりなし”。これもあまり説明は必要ないと思います。誰かのために仲裁するように、仲介するように、調停するように祈るわけです。成り代わって祈る。^{だいたう}代^{だい}禱^{とう}するという言い方もあります。代わりに祈るということです。

“感謝”は、これも説明がいらないと思います。でも、この“感謝”が最も大事だと思います。祈りの中で、お願い事ばかりで、感謝がない。「困ったんです。苦しいんです。悲しいんです。ニーズがあるんです。助けて下さい。お願いします。」嘆願ばかりで感謝がない。既に私たちには沢山のものが与えられているはずで。無い物ねだりばかりして、私たちは既に与えられているものに目が留まらず、嘆願ばかりで祈りが終わってしまう。祈りの殆どが嘆願で終わってしまう。これでは意味のあるコミュニケーション、深い親密なコミュニケーションをとることはできません。感謝が大事であります。

ピリピ 4：6～7 をお読みします。『⁶何も思い煩わないで、あらゆる場合に、感謝をもってささげる祈りと願いによって、あなたがたの願い事を神に知っていただきなさい。⁷そうすれば、人のすべての考えにまさる神の平安が、あなたがたの心と思いをキリスト・イエスにあって守ってくれます。』私たちはパニックって、思い煩って、心配・不安で心が乱れてしまうわけです。平安を失ってしまうわけです。そういう時「神様助けて下さい。憐れんで下さい。何とかして下さい。」とお願いするんですけども、その前にまずは感謝をもってとあります。感謝をもってささげる祈りと願い。これが大事です。そうすると神の平安、これは人の考えにまさる平安です。理由がなくても、根拠がなくても、よく分からないけれども心が平安である。これが神の平安です。状況がどうであれ、自分がどうであれ、人がどうであれ、人の考えにまさる神の平安がキリスト・イエスにあって、あなたのハートとマインドを守ってくれる。私たちはハートとマインドにおいて、心と思ひにおいて乱れてしまうものです。騒いでしまうものです。取り乱してしまうもの、動揺してしまうものですが、キリスト・イエスにあって、この部分が守られると。神の平安によって私たちは支えられるわけであり。心が満たされるわけであり。たとえ自分の願い事が叶えられなくても。自分の願いよりも神の願いのほうがはるかに優れている。神は私のために最善をご計画しておられる。祈りに対して応えてくれなくても、それが、その『ノー』という答えが最善なんだと。『ノー』と言われること、『いいえ』と言われること、祈りに応えられないこと、それが私たちの心を乱すのではないということです。神の平安はたとえ私たちの祈りが却下されても、それでも安心していられる、平安でいられるというものであります。その中に感謝の要素、それを是非しっかりと注入して頂いて、含めて頂いて、思い煩っている時こそ、主の良くして下さったことを一つ一つ数え上げて、主の恵み・主の祝福を一つ一つ数え上げて振り返って頂きたいと思います。去年の今頃を思い出して下さい。先週を思い出して下さい。今朝のことを思い出して下さい。主はあなたに沢山のことを既にして下さったはずであります。

テキストに戻って頂いて、1 節のところには、『**すべての人**』という言葉と『**すべての高い地位にある**』という“すべて”という言葉が2回使われております。実際には“人”という言葉は原文にはありません。単純に“すべて”という言葉が1 節の中に2回繰り返し使われてます。同じ節の中に同じ言葉が2回繰り返

返されているというのは、これは強調されているということを指しています。“すべて”のギリシャ語は“pas”（パス）と言って、やはり“すべて”という意味です。『すべて』は“すべて”という意味です。でもこれはキーワードです。1 節には2回。で、2 節にも、（これはちょっと日本語の新改訳聖書ではわかりづらいんですけども）原文では実は『すべての高い地位』というのが2 節に入ってます。正確に言いますと1 節の“パス”という“すべて”というギリシャ語は、『すべての願い』と『すべての人』というところに使われているんです。で、2 節のところは、『すべての高い地位』そして“敬虔”という言葉の前に『すべての敬虔』というふうに、原文はなっています。ですから1 節2 節には2 回ずつ“すべて”というギリシャ語“パス”が使われています。

さらには4 節、『すべての人』ここに使われています。で、6 節、『すべての人』。で、8 節、ここでは『どこでも』。これは“すべて”という言葉ですから、『すべてのところで手を上げて』という話になります。で、11 節のところ。そこでは『よく従う心』の“よく”というところが実は“すべて”という言葉です。“よく従う”というのは、意識です。直訳は『すべて従う』ということです。『女はすべて従う。』後で見たいと思いますから、楽しみにして頂きたいと思います。ですからこのように2 章の中には複数回、繰り返し繰り返し『すべて』という言葉が強調されて使われております。心に留めておいて下さい。

で、1 節に目を戻して頂いて、『すべての人のため』だけじゃなくて、『また王とすべての高い地位にある人たち』。“王”というのは原文では複数形になっています。“王たち”、そして“すべての高い地位にある人たち”と、複数の政治的・軍事的指導者たちのことを指しています。ちなみにパウロとテモテの時代、王といえばローマ皇帝ネロです。ネロのために願い、祈り、とりなし、感謝をささげよと言ってるんです。あの悪名高い狂人皇帝ネロのために。あのクリスチャンたちを迫害し、弾圧し、虐殺するような、あんな気の狂ったネロのために、願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさいと、パウロはテモテに対して、又はエペソの教会員たちに対してこれを命じてるんです。かつて日本の権力者たちも、豊臣秀吉とか、徳川家康を始めとした徳川幕府は、クリシタンたちを弾圧してきたわけです。明治に入っても政府は、クリスチャンたちを迫害し続けました。天皇もかつて現人神^{あらひとがみ}と呼ばれていたわけです。その現人神を拝まない者、天照大神^{あまてらすおおみかみ}を拝まない者たち、クリスチャンたちは弾圧されたわけです。そして獄死した者も数知れずであります。そんな独裁者たちのためにもクリスチャンは祈らなければならない。願い、祈り、とりなし、感謝をささげなければならないと言っているわけです。安倍晋三内閣総理大臣のためにもです。阿部守一長野県知事のためにもです。鷲澤正一長野市長のためにもです。最近私はブログに橋下徹さんのことも書きましたが、大阪市長の橋下徹さん、または日本維新の共同代表でもあります。そういう指導者たちのためにもクリスチャンは、願い、祈り、とりなし、感謝をささげなければならないと言っているのです。たとえ彼らがリーダーとしてふさわしくなくてもです。ネロに対しても、そうせよと言っているわけです。自民党のために。民主党のために。創価学会の公明党のために。共産党のためにも祈れと聖書は言っているわけです。社民党のために。右翼・左翼関係ありません。みんなの党のために。文字通りみんなの党のためにです。すべてどんな党だろうと。国のリーダー、自治体のリーダーのために祈りなさいと聖書は言っているわけです。政治的立場がどうであれです。あなたの好みがどうであれです。彼らの人格がどうであれ。彼らが失言しようと、失策しようと関係なく祈れと聖書は言っているわけです。もちろんこれは政治家だけでなく、それぞれの団体組織の長のためにもです。王たち、すべての高い地位にある人たちですから、例えば学校であれば校長のため、教頭のためとか。または会社であれば、社長のため、上司のために祈れと。これが聖書が私たちクリスチャンに命じていることです。あなたはこれをやっていますか。天皇陛下も、今上天皇^{きんじょう}は明仁^{あきひと}ですね。明仁天皇のためにも祈らなければいけません。アメリカの大統領、バラク・オバマさんのためにも当然アメリカ国民であるならば、国籍をそこに置いているならば、祈らなければいけません。北朝鮮の將軍様のためにも祈らなければいけないんです。

ローマ 13:1 に目を留めて頂きたいと思います。パウロが書いた手紙です。『人はみな、上に立つ権威に従うべきです。（“べきです” というのは直訳すると『従わなければなりません。』です。）神によらない権威はなく、存在している権威はすべて、神によって立てられたものです。』安倍首相も神が立てたんです。阿部県知事も神が立てたんです。守一さんも正一さんも皆神が立てたんです。あなたの上司も神が立てたんです。選挙によって選ばれた。人が推薦した。年功序列で。でもその背後には神がおられるということを忘れてはいけません。すべての権威は神が立てられたんです。皇帝ネロですらです。彼らは神の目的・計画を果たすための道具であるということを覚えて頂きたいと思います。神こそが主権者です。皇帝ネロは最高権威者であって、生殺与奪^{せいしつよだつ}の権威をもって、自らを神とする、現人神とするような人物でしたけれども、でもそんな彼を権威として置いたのは、王の王・主の主であられる神であります。神こそが真の主権者、神がすべて背後において働いておられるということです。ネロのため。ヒトラーのため。明仁のため。私たちは神の主権を認めて、神が究極の王座についておられることをいつも意識して祈らなければなりません。彼らは好き放題やるようです。クリスチャンの信仰を踏みにじるようなこと、信仰に抵触するようなことを政策として打ち出すかもしれません。それでも私たちは神の主権を信じて、彼らをただ批判するだけじゃなく、ただ反対するだけじゃなく、願い、祈り、とりなし、感謝をささげなくてはなりません。「願ったり、祈ったり、とりなしたりするのは、何とかできそうです。でも感謝はちょっと出来そうにありません。なぜネロのために感謝できるんですか。なぜヒトラーのために感謝なんかできるんですか。なぜオバマのためにとか。安倍首相のために感謝なんかできるんですか。」とあなたは思うかもしれません。ローマの初代皇帝アウグストのことを思い出して下さい。ルカ 2 章に出てきます。この初代皇帝アウグストはローマ帝国全体に対して「住民登録をせよ。」という勅令を出します。この目的は税を集める、徴税目的であります。その際には、それぞれが出身地^{おもむ}に赴いてそこで住民登録をしなければならないと、命じたわけです。このような命令が現代私たちの国家になされたら、私たちはきっと反対すると思います。とんでもない政策であると。私たちはそのような暴政に対して反対キャンペーンを展開するかもしれません。デモをもって行進するかもしれません。プラカードなんかを出しながら「反対、反対」とやるかもしれません。しかし、このアウグストの勅令は、実は聖書のメシヤ預言と深い関わりがあるものだったわけです。有名なメシヤ預言があります。ミカ 5:2。『ベツレヘム・エフラテよ。あなたはユダの氏族の中で最も小さいものだが、あなたのうちから、わたしのために、イスラエルの支配者になる者が出る。その出ることは、昔から、永遠の昔からの定めである。』来るべき約束のメシヤはベツレヘムでお生まれになるというメシヤ預言があったわけです。この預言と初代皇帝アウグストの「住民登録をせよ。」、徴税目的の無謀な政策が、実は深い関わりがあるということです。イエスの育ての親である養父ヨセフと、またイエスの実の母であるマリヤは共にユダ部族で、ダビデの家系であり、彼らの出身はベツレヘムでありました。ダビデ王はベツレヘムで生まれたわけです。ですからこの住民登録の勅令によって彼らは故郷のベツレヘムに行かなければいけなかったんです。でもその当時ヨセフとマリヤはナザレという所に住んでいました。ナザレはイスラエルの北部です。一方でベツレヘムはイスラエルの南部であります。直線距離でナザレからベツレヘムまでは 120km ありました。120km から 160km の道のりです。それを車でひとつ走りじゃないんです。歩いて、若しくはロバか何かに乗って行かなければいけない。ベツレヘムも標高が 800m 程ありましたから、丘陵地帯を抜けていかなければいけない。危険も伴ったわけです。お金もかかる。手間もかかる。労力もかかる。危険も伴う。それに加えて、マリヤはその時、身重だったのです。イエスを妊娠していたわけです。まさに臨月を迎えようとしていたその時に、ロバの背に乗って長旅をしなければいけない。これはありえないことですね。でも逆らえば大変なことになります。普通ならばナザレからベツレヘムに身重の女性が、妊娠中の女性が旅をするなんてことは、まず考えられないこと、ありえないことです。でもローマ皇帝の絶対命令ならば、従わざるを得なかったわけです。行かないわけにはいかない。で

も神は敢えて、強いて皇帝アウグストのこの住民登録の政策を認めて、そして言わばそれを許可したわけです。アウグストの心のなかに住民登録をしたいという思いが芽生えて、それを神が許可したんです。神の許し無くしては、アウグストは何も言うことも、何も決めることも、どんな政策を打ち出すことも出来ないんです。すべては神の許可無くしては出来ないんです。サタンですら神の許可無くしては何も出来ないんです。サタンは神の許可も得ずに好き放題勝手にやっていると思ったら大間違いです。すべては王の王、主の主である神の許しのもと、許可のもとにやっている。これはヨブ記を見れば明らかです。ですからアウグストも神の許可を受けてこの住民登録をしたわけです。なぜ神は許可したのか。それはミカ 5:2 のメシヤ預言があったからです。住民登録、これには強制力があったわけです。身重であってもナザレから出なければいけない。ベツレヘムに行かなければいけない。そしてベツレヘムで産まなければいけない。タイミングも驚くべきタイミングです。臨月の時でなければいけないわけです。結婚したての頃、ただその当時聖霊によってマリヤは身ごもっていましたから、この臨月のタイミングも神が絶妙に図ったわけです。それとアウグストの勅令がピッタリ合ったわけです。他にもユダヤの王ヘロデもこれに関わるわけです。旧約聖書の中にはメシヤ預言として知られているものが 350 以上ありますけれども、そのすべてはナザレのイエスにおいて成就しました。その成就においてはローマ皇帝を始め、ヘロデ大王ですとか、いろいろ王若しくはローマ総督といった高い地位にある人たちも、いわば巻き込まれて彼らも道具のように神の摂理の中で使われて、それで初めて神の計画が遂行されたということです。ですからネロにしても神の道具・操り人形に過ぎないということです。すべての背後には神がおられるということです。神は常にシナリオを書いているんです。すべてはシナリオ通りに進むんです。その中の登場人物にネロがいるだけです。彼が権威にあるのは、神がそれを許しているからであります。神の目的を果たすために、ただ彼はそこに置かれているだけです。やることなすことすべて神のご計画の中で、許しの中でそれが行われていたということです。この視点を私たちも持たなければいけません。この感覚、この概念を、私たちもしっかりと持った上で、『また王とすべての高い地位にある人たちのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。』というこの命令に聞き従わなければいけません。そうすると、願って、祈って、とりなすことだけじゃなくて、感謝すらささげられるようになると思います。皇帝アウグストのことすら感謝ができる。皇帝ネロのことすら感謝ができる。安倍内閣総理大臣のためにも感謝ができる。アベノミクスがうまくいかなくても、株価が急落しようとも、為替がどうだろうと、それでも感謝ができるわけです。これが私たちクリスチャンの視点であり、これが私たちクリスチャンのなすべきことです。マルティン・ルターは、宗教改革者のルターは、こう言いました。「服を作るのが仕立屋の仕事であり、靴を直すのが靴屋の仕事であるように、祈ることはクリスチャンの仕事である。」と。祈ることはクリスチャンの仕事です。ここで言う“仕事”は特に上に立つ権威の、権威ある者のためにとりなすということです。これもクリスチャンの仕事であります。職務怠慢であってははいけません。仕事を放り出して、仕事以外のことをしてはなりません。簡単に私たちはテレビのコメンテーターのように政治的指導者のことを批判したり、非難したりします。もちろん批判や非難をしてはいけないと言っているのではありません。政治的な意見を一切言っははいけないと言っているのではありません。そんな暇があるならば、祈りなさいと言っているのです。批判するよりも祈ることにもっと時間を割けと言っているわけです。ですから批判するならば、まずは祈るということ。で、祈っているうちにひょっとしたらその批判は、もう無くなるかもしれません。で、他にもルターの言葉として「祈りはとりなしによって活発され、懇願によって差し迫ったものとなり、感謝によって喜ばしい神に受け入れられる祈りとなる。力強くかつ受容的な態度で祈ることによって私たちは願うものを確かに受けるのである。」願い、祈り、とりなし、感謝という要素がルターの言葉の中にも織り込まれています。また S・D・ゴードンという人の名言もご紹介します。「祈る人ほど今日の世界で重要な人はいない。それは祈りについて語る人でもなければ、祈りについて説明できる人でもな

い。時間を割いて祈る人である。彼らには時間がない。それは他のことを犠牲にした時間であろう。他のことも大切であり、また差し迫ったものである。しかし祈りほど重要で差し迫ったものはない。」祈りの人は、もう祈ることで手一杯です。祈りに要する時間が膨大なので、不平不満を言ったり、ゴシップしたり、中傷したり、批判したり、そういう暇がないと言っているわけです。またオズワルド・チェンバーズという人もこう言っています。「とりなしという奉仕に誘惑はありません。自惚れたり、高慢になったりする危険もあります。これは実を結ぶ影の奉仕です。これによって御父は栄光を受けます。」とりなしという奉仕には誘惑はないと。とりなししている人は、へりくだっている者です。とりなさない人たちは、自惚れている高慢な人と言えるわけです。自分が何でも知っているかのように知ったかぶるわけです。「私だったらこうするのに。私だったらこのような政策を敷くのに。」とか、偉そうに言うわけです。でもとりなしという奉仕には誘惑はありません。

また今から聖書箇所も皆さんにいくつか開いて頂きたいと思います。イザヤ 59 : 14~16『¹⁴ こうして公正は退けられ、正義は遠く離れて立っている。真理は広場でつまずき、正直は中に入ることもできない。¹⁵ そこで真理は失われ、悪から離れる者も、そのとりこになる。主はこれを見て、公義のないのに心を痛められた。(特に注目して頂きたいのは 16 節) ¹⁶ 主は人のいないのを見、とりなす者のいないのに驚かれた。そこで、ご自分の御腕で救いをもたらし、ご自分の義を、ご自分のささえとされた。』祈りはクリスチャンの仕事です。とりなすこともクリスチャンの仕事ですが、主はとりなす者がいないのに驚いたと。もう一箇所エゼキエル 22 : 30 もお読みします。『わたしがこの国を滅ぼさないように、わたしは、この国のために、わたしの前で石垣を築き、破れ口を修理する者を彼らの間に捜し求めたが、見つからなかった。』“破れ口を修理する者”これがとりなす者のことであります。神様はとりなす者、破れ口を修理する者を探し求めておられます。あなたはこの国の指導者のためにとりなしているでしょうか。あなたは自分の所属する組織の長のために、上司のために祈っているでしょうか。家庭のリーダーのために、家長のために祈っているでしょうか。夫のために、お父さんのために、クリスチャンは祈らなければいけません。文句ばかり垂れているでしょうか。不平不満ばかり言っているでしょうか。非難や批判ばかり言っているでしょうか。そんな暇があれば、そんな罪を犯す位なら、黙ってとりなして頂きたいと思います。とりなさない、祈らないことは、聖書で明確に罪だと言っています。第 1 サムエル 12 : 22~23 にそう書いてます。『²² まことに主は、ご自分の偉大な御名のために、ご自分の民を捨て去らない。主はあえて、あなたがたをご自分の民とされるからだ。²³ 私もまた、あなたがたのために (サムエルが語っています。) 祈るのをやめて主に罪を犯すことなど、とてもできない。私はあなたがたに、よい正しい道を教えよう。』祈らないなんて出来ないと。それは罪だと。テキストの第 1 テモテ 2 : 1 には命令されています。『願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにしなさい。』と。これは命令です。これをしなければ命令違反。すなわち罪となるわけです。私たちは沢山の罪を犯していますが、この罪は重いです。とりなすことをしない。これは重い罪であります。とりなすためにあなたは救われ、ここに召されているんです。地上に置かれているんです。自分のお願い事をするために、自分の願いを叶えてもらうために、ここに置かれているわけではありません。神の願いをあなたは知っているはずです。神の思いをあなたは知っているはずです。それを汲み取って、そして神の願いに応えるべくとりなす必要があります。神は何を望んでおられるのか。この国の指導者のために祈るのです。この国民のためにとりなすのです。

で、テキストに戻って頂いて第 1 テモテ 2 : 2。『それは、私たちが敬虔に、また、威厳をもって、平安で静かな一生を過ごすためです。』“私たちが過ごすため”とあります。これが理由・目的です。“敬虔”これは直訳すれば『神のように』ということです。“威厳”これは他にも『品格』とか(高潔な人物の)『高潔』というふうにも訳すことが出来ます。『尊敬に値する』という言葉でもあります。で、また“平安”説明が要らないと思います。『静かな一生』この“静かな”という言葉は 2 章の中には度々新改訳聖書では使

われていますけれども、この**2 節**の“静かな”はギリシャ語の“eremos”（エレモス）と言います。後に出て来る“静か”にするというのは、別のギリシャ語なのでその際にまた説明します。で、**2 節**の“静かな”は“エレモス”、これは『静寂、平穩、^{のどか}長閑、落ち着いた』という意味です。騒がしくないという状態です。周りが騒がしくない。環境が騒がしくない。それが“エレモス”と。静かな状態です。あなたの今の生活はどうでしょうか。敬虔な生活を送っているでしょうか。威厳のある生活を送っているでしょうか。品格・高潔な生涯でしょうか。平安があるでしょうか。静かな毎日でしょうか。静寂、平穩、長閑、落ち着いた、騒ぎがない日々でしょうか。もしクリスチャンが下手に深入りして政治活動などに関わりますと、この敬虔さ、この威厳、平安、静かな一生を失うことになります。逆にクリスチャンが必要以上に政治活動に関わり過ぎますと、騒がしい毎日、けたたましい毎日、緊張状態（テンション）があるわけです。そして怒り、「あの政治家何をやっているのか。何を言っているのか。」とか、またあの政党に対して^{てきがいしん}敵愾心すら抱くようになるわけです。国粋主義者、愛国者という人たちは、かなり右寄りになっていって、そしてそうでない人たちを“反日分子”と呼んだり、また韓国や中国のことを“反日”とか“抗日”とか言って敵愾心むき出しにして、差別発言・ヘイトスピーチすら飛び出してくるわけであります。クリスチャンがそうであってはいけないと言っているわけです。もちろんその逆も^{しか}然りです。左に寄り過ぎててもいけません。右に寄り過ぎててもいけません。クリスチャンが下手に政治に関わり過ぎると、このような敬虔、威厳、平安、静かな一生を損じることになります。もちろん誤解ないようにして頂きたいのは、クリスチャンは一切政治に関心を持つてはいけないと言っているのではありませんし、クリスチャンが政治家になってはいけないと言っているのでもありません。そうではなくて、そのような召しがあれば別ですけれども、そうでないならば下手に政治活動に深入りしない方が良いと言っているわけです。むしろそんな活動に深入りする前に、私たちは彼らのために願い、祈り、とりなし、感謝がささげられるようにする。これが本来のクリスチャン的な政治活動と言っていると思います。多くのクリスチャンたちは、このような祈ることをせずに、むしろ叫ぶことばかりしています。反対だとか、反日だとか、いろんなことを言って、けたたましい日々を送っているわけです。怒り、敵愾心に駆られているわけです。あってはいけないことです。ね。**エレミヤ 29：4～7** もぜひ参照して頂きたいと思います。『⁴イスラエルの神、万軍の主は、こう仰せられる。「エルサレムからバビロンへわたしが引いて行かせたすべての捕囚の民に。（これはイスラエルが異教の地バビロンに捕虜となって、強制連行されて、そこで暮らしていたというのが背景です。）⁵家を建てて住みつき、畑を作って、その実を食べよ。⁶妻をめとって、息子、娘を生み、あなたがたの息子には妻をめとり、娘には夫を与えて、息子、娘を産ませ、そこでふえよ。滅ってはならない。⁷わたしがあなたがたを引いて行ったその町の繁栄を求め（すなわちバビロンの繁栄を求め）、そのために主に祈れ。（バビロンのために祈れと。）その繁栄は、あなたがたの繁栄になるのだから。』」ここで止めておきます。神はバビロンに強制連行された、捕囚の民となったイスラエルの人たちに対して「あなたがたはそこで平穩な毎日を過ごせ」と。生活の安定・繁栄を祈り求めよ。バビロンの国のためにもとりなせ、祈れと。祝福を祈れと言っているわけです。ただし、それは 70 年限定の話です。70 年間経ったら彼らはバビロンから再び祖国に帰還出来たわけです。これはエレミヤが預言しているところであります。同様に私たちも今は、この世というバビロンに暮らしていますが、それもまた期間限定であるということを忘れてはいけません。ここにいる多くは日本国民です。国籍は日本であります。でもクリスチャンの国籍は本来は天にあるんです。ここでは期間限定の生活だけであります。でもここで私たちは自分たちの生活の安定・繁栄を祈るべきなんです。この国のためにも祈るべきなんです。でもそれは期間限定であることを常に心に留めなくてははいけません。ここがすべてじゃないんです。この世が私たちの安住の地、定住の地、永住の地ではない、終の^{すみか}棲家じゃないということを忘れてはいけません。ここが私たちの故郷じゃないんです。故郷は天にあります。国籍は天にあります。いつか私たちもそこに行くんです。それまでの間、神がかつてバビロンの捕囚

の民に語ったように、命じられた通り、私たちもこの国のために、この国民のために祈るべきなんです。でもいつか私たちはこの世を去って、祖国に帰還するんです。期間が終われば帰還するんです。イエス・キリストが迎えに来られます。または私たちは単純に老いてこの世を去る。病気で、事故で、災害で、ある日急に地上の命を終えるかもしれませんが、でもそれで私たちは祖国に帰れるんです。この世は神のシナリオ通りに進むんです。この世がこれからどうなるのか。すべて聖書の中に預言されているんです。特に今は世の終わりですから、世の終わりの終末預言というのが聖書に記されています。新聞の一面を見るとまるで黙示録を読んでいるようです。これから世界がどうなるのか。この日本がどうなるのか。イスラエルを中心に世界情勢は回っているわけです。すべて神の摂理によるものです。神のご計画通りに歴史は進んでおります。そこに時の権力者たちが、ただパペットのように、操り人形のように、道具のように、据えられて、上げられているだけであります。だから私たちは神の摂理の、神の計画若しくは御心を祈るわけです。主の祈りにもありますね。『**天でみこころが行われるように、地でもおこなわれますように**』と。これが私たちの祈るべきことであります。そしてもちろん彼らがイエス・キリストを知ることができるように。残念ながらこの世は決して良くなりません。悪くなる一方です。環境もそうですけれども、政治的にも軍事的にも、経済的にも、宗教的にも何もかも悪くなる一方です。でも、それでも祈れと言っているのです。それでもバビロンの捕囚の民に対して神は生活の安定と繁栄を祈れと。祝福を祈れと言っているわけです。バランスが必要であります。「どうせ世は悪くなる一方だから祈ってもしょうがない」じゃないんです。祈りなさいと言っています。とりなしなさいと言っています。でもこの世がすべてではないということも心に留めなくてははいけません。第2歴代誌7:14も有名な箇所です。これも併せて参照して頂きたいと思います。『**わたしの名を呼び求めているわたしの民がみずからへりくだり、祈りをささげ、わたしの顔を慕い求め、その悪い道から立ち返るなら、わたしが親しく天から聞いて、彼らの罪を赦し、彼らの地をいやそう。**』クリスチャンは祈らなければいけません。クリスチャンが祈らないから、罪が赦されない、この地はいやされないんだということも覚えて頂きたいと思います。この社会は何故こんなにも歪んでしまったのか。何故こんなにも墮落してしまったのか。それは、『地の塩、世の光』である私たちクリスチャンが全くその勤めを果たしていないからです。自分たちの立場・役割を全く意識もしていないからです。やることをやってないからです。仕事を放棄しているからです。祈らなければいけません。とりなさなければいけません。罪の赦し、この病的な社会の癒やし。それは私たちクリスチャンのなすべきことです。

で、今度はテキストの3節にお戻り下さい。第1テモテ2:3『**そうすることは、私たちの救い主である神の御前において良いことであり、喜ばれることなのです。**』神様において良いとされること。神様において喜ばれること。これがクリスチャンがどうしても押さえなければいけないこと、欠かしてはいけません。自分において良い、人において良いじゃないんです。自分が喜ぶ、人が喜ぶじゃないんです。神において喜ばれること。これをクリスチャンならば誰もがそうしたいと願うものですね。そうしたくないという人は、クリスチャンの中には一人もいないはずであります。命令だから仕方ないじゃなくて、神様が良い、神様が喜ぶのであれば、良いこととして、喜ばしいこととして私たちクリスチャンもそれを積極的に、自発的に遂行すべきであります。言われなくてもそうすべきであります。で、3節の中で『**私たちの救い主である神**』というこの言葉にも注目して下さい。これは特別な表現であると言いました。

第1テモテ1:1にも『**私たちの救い主なる神と私たちの望みなる（希望なる）キリスト・イエス**』と、父と子が並んで出てます。通常イエス・キリストが救い主と呼ばれることが多いんですけれども、ここでは『**救い主なる神**』、父なる神が救い主と呼ばれています。この特殊なタイトル・称号が3節にも繰り返されています。第1テモテ2:3には『**私たちの救い主である神**』父なる神のことです。これが敢えて意図的に使われているのは、すべての人のために祈るということが、とりなすということが、すべての人の救いにつながるということです。私たちは救い主に対して祈っているのです。救われるために。王たちが、す

すべての高い地位にある人たちが、救われるために。あなたの上司が、あなたの父親が、あなたの夫が、あなたの国の指導者が、救われるように。祈りは救いにつながります。私たちの祈りがなければ、神は救うことが出来ないと言うわけではないです。でも不思議なことに神は私たちの祈りを用いて下さる。神が政治的な指導者を用いて神の計画を遂行されるように、神は私たちクリスチャンの祈りを用いてその救いの働きをなされる。であるならば、私たちは大いに祈るべきであります。あの人にも救われて欲しいと思うならば、祈るべきです。明仁天皇に救われて欲しいと思うなら祈るべきです。「どうせ彼は神道でしょう。」なんて言わないで下さい。美智子さんはカトリックですね。祈って欲しいと思います。他にも皆さんが思い当たる上に立つ権威。救いからほど遠いと思っていても、「あの人^{かたく}は頑^{あきら}なだ。あの人^{あきら}はキリスト教を毛嫌いしている。」そういう人でも、救われそうにないと失望して、幻滅して、諦めかけていたあの人のためにも、この人のためにも、祈るべきであります。救い主である神に対して期待すべきであります。私たちが人を救うのではありません。私たちの熱心な祈りが、絶え間ない祈りが救うんじゃないで、神が救うんです。それを私たちは信じて祈り続けなければいけないんです。これは私たちの信仰の問題です。信じているかどうかです。信じていない人は祈りません。すぐに諦めます。すぐにギブアップします。「救われないのは、あの人^{あきら}のせい」じゃないんです。救われないのはあなたが祈らないから。あなたが信じないからです。神には出来ないことは一つもありません。不可能は一つもないはずであります。確かに金持ちは中々救われません。金持ちが救われるよりは、むしろくだが針の穴を通るほうがもっとやさしい。でもその後でイエスは何とされているのでしょうか。「それは人にはできないことです。しかし、神にはどんなことでもできます。」と。確かに金持ちは、中々救われないかもしれません。金を頼りにしている以上は。神にも富にも人は仕えられません。でも神には不可能なことはないんです。

で、次に4節『神は、すべての人が救われて、真理を知るようになるのを望んでおられます。』これが神のハートです。このハートを私たちはしっかり汲み取って祈らなければいけません。あなたは本当に望んでいるのでしょうか。あの人^{あきら}が救われることを。あの人^{あきら}が真理を知るようになることを。1〜3節においては、人について神に話すことが言われてました。人について神に話す。神様に人について話すということです。4〜7節の内容は、神について人に話すことです。言い換えれば、伝道する、宣教するということです。この違いを見て頂きたいと思います。先ず第一に伝道よりも、神について人に話すことよりも、優先順位は人について神に話すということです。人について、あの人^{あきら}のために願い、祈り、とりなし、感謝をささげるとのこと。これが先です。祈る前に先走ってはいけません。伝道することも大事ですが、その前に祈ること。祈ってから伝えるということです。人について神に話し、神について人に話す。この順序です。これがクリスチャンの責務です。これを責任を持って私たちはこの地上に置かれている限り果たさなければいけません。『すべての人が救われて真理を知ること』を神は望んでいます。皇帝ネロも、明仁天皇も、安倍総理もです。

で、もう一つ注目すべきは、『すべての人が救われて』その後に『真理を知るようになる』というこの順序です。救われてから、救われた後に、真理を知るんです。真理を知ってから、救われるんじゃないんです。「私はまだまだ聖書も理解出来ませんし、聖書も全部読んだわけではないですから、もうちょっと勉強してから信じたいと思います、クリスチャンになりたいと思います。」という人がたまにいます。でも救われなければ、いつまでたっても真理を知ることが出来ないということを覚えて頂きたいと思います。逆に救われたならば、真理を知ることが出来るんです。目が開かれるんです。全然分からなかったことが、チンプンカンプンだったことが分かるんです。皆さんもそういった体験を持っていると思います。初めて福音を聴いた時、初めて教会に行った時、初めて牧師のメッセージを聴いた時、ノンクリスチャンの時にはさっぱり、チンプンカンプン。日本語を話しているはずなのに全然分かりませんと。「何ですか、この人の言っていることは。全然分かりません。」でも救われてから、イエスに出会ってから、イエスに触れられて

から、あなたは目が開かれるわけです。盲目だった目が開かれる。ふさがれた耳が開かれる。勉強もできないのに、本を読むのも苦手なのに、救われてから、クリスチャンになってから、神の子供になってから、ハッと気付く。ある時、急に分かる。「このことだったのか。こういうことだったのか。あの時、あの牧師が言っていたことはこういう意味だったのか」と。「ここに書かれている聖書の聖句はこういう意味だったのか」と、後に救われてから分かる。こういうことが私たちの体験であると思います。救われてから、心理を知るんです。真理を知ってから、救われるのではありません。だから、「まだ私は真理が分からないので、信じません」とか、「もうちょっと勉強してから、聖書を一生懸命学んでから信じます。」なんて人はいつまでたっても信じないと思って下さい。それは詭弁^{きべん}でしかないということです。最初から救われるつもり、信じるつもりはありません。それは全然順序が逆で、あべこべで、あなたは先ず信じなければいけない。先ず救いを経験しなければ、いつまでたってもこの聖書は分かりませんよと。真理は概念じゃないです。真理は人格なんです。「私が真理だ。」と、イエスはおっしゃってます。真理は人格なんです。イエスと知り合わなければいけないのです。これを知性で理解しようとするならば、あなたは真理を理解することは出来ません。相手のことをろくに分からなくても、先ずはその人と会って話をする。そのうちに分かってくるんです。

で、5 節『神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。』神は唯お一人ですけれども、でも神と人との間の仲介者も唯お一人。矛盾しているように聞こえるかもしれません。父なる神も唯一。子なる神イエス・キリストも唯一。聖霊なる神も唯一。全然私たちの頭の中には消化されません。調和できません。理解できません。「三人いるじゃないですか。何故それなのに唯一なんですか。1 + 1 + 1 = 3 じゃないですか。小学生でもそう考えますよ。」でも、小学生でも $1 \times 1 \times 1 = 1$ だと考えます。よく分かりませんが、でも聖書でそう言っているものを私たちは額面通り、文字通り、素直に受け取るものであります。聖書において「神が、父が唯一だ。」と言っているならば、唯一だと信じます。聖書において「神と人との間の仲介者、すなわち子なる神イエス・キリストも唯一だ。」と言えば、私たちは唯一だと信じるわけです。イエスは 100% 神であり、100% 人間である。

「200% じゃないですか、それでは」と。そうじゃないんです。聖書において「イエスが 100% 神、で同時に 100% 人間だ。」と言われるならば、私たちはその通りに信じるわけです。三位一体の概念は、人間には把握しきれません。もし把握しきれれば、その三位一体の神はあなたの脳ミソよりもちっぽけな神に過ぎませんので、私たちは自分の頭の中で把握されてしまうような神に、もはや頼ることは出来ません。でも自分の脳ミソを遥かに超えた、理性を遥かに超えた偉大な神であるならば、私たちは安心して自分の人生を任せられるわけです。自分を遥かに超えた存在。自分の能力を遥かに超えた存在。遥かに偉大なお方であるならば、私たちは人生をかけることが出来ます。全幅の信頼を置くことが出来ます。自分以上の存在だからこそ、信頼できるわけです。自分と同じ若しくは自分以下ならば、大したものじゃないですから、そんな頼りに出来ないわけです。単純な話であります。イエスのような仲介者、調停者は他にはおりません。100% 神であり、100% 人間である。唯一無比です。そのような救い主は他にはおりません。世界にも沢山の偉人・聖人はおります。沢山の宗教家はおります。沢山の道德教師はおります。仏陀にしても、孔子にしても、ムハンマドにしても、ソクラテスにしても、確かに彼らは偉人・聖人の部類に入るかもしれませんが、彼らはただの人間でした。死んで、葬られて、終わりです。でもイエスは違います。イエスは神でありながら、人の姿をとったんです。日本では、偉大な人物は死んでから神に祀り上げられますけれども、イエスは最初から最期まで徹頭徹尾神だったのです。神であるのに人になられたのです。で、人としてこの世を生きただけですけれども、一つも罪を犯しませんでした。ありとあらゆる誘惑を受けられたにもかかわらずです。罪を犯さなかったんです。そして罪の無いまま、私たちのすべての罪を十字架で負って、死んで、葬られて、三日目によみがえられた。こんなお方は他にはありません。

そして天に上げられたわけです。唯一のお方です。他には救い主はおりません。(ヨハネ 14:6)『わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれひとり父のみもとに来ることはありません。』(使徒 4:12)『この方以外には、だれによっても救いはありません。天の下でこの御名のほかに、私たちが救われるべき名は人に与えられていないからです。』とペテロも言いました。ですから私たちは聖書に書かれている通りの神、聖書に書かれている通りの子なる神・救い主・仲介者イエス・キリストを信じる者であります。イエスが私たちの模範です。神と人との間に立つ仲介者。クリスチャンもキリスト的なミニストリーを行うべく、ここに召されています。私たちも仲介者です。とりなす者ですね。イエスは神の右の座において今も私たちのためにとりなしておられます。私たちもイエスに倣うものとして、このとりなしのミニストリーに与^{あずか}っていることをいつも覚えて頂きたいと思います。これが私たちの仕事です。責務であります。アウグスティヌスという人はこう言いました。「神が人となられたのは何故か。人間であるあなたは、神に届くことが出来ないが、他の人間になら届くことが出来る。そして今あなたは一人の人のを通して神に届くことが出来るようになった。なぜなら人として来られたキリスト・イエスが、神が人類との仲介者になって下さったからだ。神は人となられた。それはその人に従うことによって(これならあなたにも出来る)あなたが神に届くことが出来るようになるためである。かつてこれはあなたには不可能なことであった。」かつて神に届くことは不可能なことでした。でも人となられた神を通して、神に届くことが出来るようになったのです。人から人には届けるんです。人から神には届くことが出来ません。有限なるものが、無限なるものに触れることは出来ないのです。罪汚れた者が、聖なる神、義なる神に触れることは出来ないのです。でも人になら人は届くことが出来ます。それがイエスという仲介者です。ありがたい話です。本当に感謝な話です。またブレイズ・パスカルはこう言っています。「イエス・キリストの上に起こったことがすべて一人一人のクリスチャンの魂と肉体の上にも起こるはずだ、ということがキリスト教の偉大な教えの一つです。イエス・キリストが人としての生涯を苦しみ抜かれ、この死すべき人の生を死なれ、新しい生命によみがえり、天に上り、父なる神の右に座された。そのようにクリスチャンの肉体も魂も苦しまねばならず、死なねばならず、よみがえり、天に上り、父の右に座らねばならないのです。」と。クリスチャンもイエスと同じ様にならねばならないと、一言で言うとパスカルはそう言ったわけです。これがうれしいことじゃないですかと。これがありがたいことじゃないですかと。私たちも罪に死に、私たちも罪から救われ、私たちも永遠の滅びからよみがえり、永遠の命を受け、そして父の身許に帰る。イエスと同じ道程を進むようになるわけです。またパスカルはこうも言っています。「イエス・キリストを通してのみ神を知るだけではなく、イエス・キリストを通してのみ自分を知る。イエス・キリストを通してのみ生と死を知る。イエス・キリストを除いて自分の生、自分の死、“神と自分自身は何なのか”を知ることは出来ない。」

『神は唯一です。また、神と人との間の仲介者も唯一であって、それは人としてのキリスト・イエスです。』この神観を歪めるような教えがエペソの教会に入り込んでいたと思われます。だからこれを敢えてパウロはデモテに対して強調して述べているわけです。イエス・キリスト以外に救い主はいない。イエス・キリスト以外に救いはない。イエス、プラスアルファなんていう救いは無いということです。でも違ったことを教える人たちは、「イエスを信じるだけでは不十分ですよ。この律法の行いをしなければあなたは救われない。あなたはきよめられない。救いを失ってしまう。」と。違ったことを教える者たちがあったということが示唆されています。

で、6節の方に目を移して下さい。『キリストは、すべての人の贖いの代価として、ご自身をお与えになりました。これが時至ってなされたあかしなのです。』すべての人の贖いの代価。あなたの隣の人のため。前の人、後ろの人、そしてここにいない人たち、まだイエスを知らない人たちのためにもイエスは死なれたんです。“贖いの代価”という言葉は他の聖書の箇所にも見られる言葉ですけども、しかし実際に原文

では、これは特殊な用語であります。”antilitron”（アンティルトロン）。”anti”（アンティ）という言葉が使われてるんですけども、“アンティルトロン”という言葉は、意味は単純に『代価』という言葉です。

“贖い”という言葉は原文にはありません。ただの『代価』です。これは“身代金”と訳せる言葉です。特に奴隷を買い取る時の代価。奴隷を解放するために代価を払うわけです。又は捕虜を解放するために代価を払うわけです。昔は貧乏で日本人の女性は身を売ったわけです。身売りしたわけです。その身売りした、性的奴隷となった遊女を、遊郭に勤める女性たちを、お金を払って見受けする。そういうことが昔、日本でも行われていたわけです。そのように奴隷を買い取る、捕虜を買い取る、そういう買い取る『代価』のことを“アンティルトロン”と言ったわけです。私たちは、まさに罪の奴隷だったわけです。イエスはこの私たちを買い取るための『代価』となられて、ご自分の命を差し出されたわけです。人の命に対しては、人の命。お金では換算できないわけです。ですからイエスは自分の命を代価としたわけです。『代価として』の“として”という言葉。これはギリシャ語では“huper”（フペール）という言葉です。これは“代わりに”という言葉です。“アンティルトロン”も『代わりに』。”anti”（アンティ）というのは『反対する』という意味でもありますけれども『代わりに』という意味もあります。『代わりに』、『身代わりに』。つまり原語では、“代わりに”という言葉が繰り返されているということです。強調されているということです。

“アンティルトロン”、“フペール”、『代価の代わりに』、『身代わりに』、『身代金に』と、繰り返し繰り返し同じような類義語が、同義語が使われているのは、強調しているということです。すべての人の身代わりとなって、身代金をイエスが自らの命をもって支払って下さったということです。

これについてはヘブル 2：9『ただ、御使いよりも、しばらくの間、低くされた方であるイエスのことは見えています。イエスは、死の苦しみのゆえに、栄光と誉れの冠をお受けになりました。その死は、神の恵みによって、すべての人のために味わわれたものです。』イエスはすべての人のために死を味わわれた。『すべて』キーワードです。第2ペテロ 3：9『主は、ある人たちがおそいと思っているように、その約束のことを遅らせておられるのではありません。かえって、あなたがたに対して忍耐深くあられるのであって、ひとりでも滅びることを望まず、すべての人が悔い改めに進むことを望んでおられるのです。』神はすべての人が悔い改めに進むことを望んでおられる。さらに第1ヨハネ 2：2『この方こそ、私たちの罪のための——私たちの罪だけでなく、世全体のための——なだめの供え物です。』“すべて”という言葉は使われていませんが、ただ『世全体のための』世界全体のための。イエスはクリスチャンのためだけに死んだのではないんです。信じる者のために死んだんじゃないくて、すべての人、信じていない人、またはこれから先も信じようとしらない人、すべての人の罪のために死なれたんです。信者・不信者問わずです。クリスチャンだろうと、イスラム教徒だろうと、共産党員だろうと、無神論者だろうと、ヒンズー教徒だろうと、仏教徒だろうと、神道だろうと、関係なくです。幸福の科学だろうと、創価学会員だろうと、関係なくです。すべての人のためにイエスは死なれたんです。ですから、すべての人はイエスの救いに与る、恵みに与るという、幸いな立場にあるということです。ただすべての人が救われるわけじゃないんです。残念なことですけども、神はすべての人に救われて欲しいと心の底から願ってるんです。ひとり子イエスを与えたほどに世を愛し、すべての人が悔い改めに進むことを心の底から望んでおられるんです。神のみこころはすべての人が救われることなんです。にもかかわらず、すべての人は神のみこころに答えようとはしません。神の願いに沿うことをしないんです。イエス・キリストを信じることをしないんです。救われて、永遠の命を頂いて、天国に行くことを望まないんです。むしろ地獄に行くことを望むんです。イエスを信じないことを選ぶんです。悔い改めないことを選ぶんです。その数は少なくないということです。聖書の中にも書いてます。大勢の人たちがイエスを信じないで、残念ながら大勢の人たちが地獄を選び、永遠に滅びてしまう。少なくないんです。「全員が全員、天国に行って欲しい。」これが神の願いなのに、大勢の者は「神なんか嫌だ。天国なんか嫌だ。天国に行く位なら地獄へ行く。」という道を選ぶんです。イエス・キ

リストの十字架を踏みつけて行かない限り、人は地獄に行くことは出来ないんです。「知りませんでした。勝手に地獄に落とされちゃいました。」なんてことは絶対ないんです。分かっている、意図的に十字架のイエスを踏みつけてから、彼らは地獄に行くんです。それが現実であります。ですから、神が勝手に地獄に落とすなんて思っているはいけません。「信じない者を神は、冷徹に冷酷に血も涙もないようにして地獄に落とす。」そういうことを神様がされるんじゃない。これを誤解してはいけません。

で、テキストに戻って頂いて**第1テモテ 2:7**。私たちはこの神を伝える者としてここに召されています。パウロはこう言っています。『**そのあかしのために、私は宣伝者また使徒に任じられ——私は真実を言っており、うそは言いません——信仰と真理を異邦人に教える教師とされました。**』パウロは自分のことを、宣伝者、使徒、教師と言いました。まあ自称したわけです。自分の立場、自分の役職、自分の役割をパウロは常に意識していました。それをもう一度ここでテモテに対して強調しています。なぜならば、テモテにこの自覚を持って欲しかったからです。「あなたはこの神を知っているでしょう。あなたは私と同じ様にこの神の救いの宣伝者である。使徒である。教師である。」と。**第1テモテ 1:3**に、違ったことを教える人たちがエペソの教会に入り込んできたわけです。その違ったことを教える人たちに対して、ヒメナオやアレキサンデルに対して「あなたは健全な信仰と真理を知っている者。それを宣伝すべき者。そのためにあなたは遣わされたんじゃないか。そのことを教えるためにあなたはここに置かれているのではないか。」と、もう一度パウロはテモテを奮い立たせるようにして、言っているわけです。で、『宣伝者』というのは“宣教者”というふうにも訳せます。原語は“kerux”（ケルックス）と言います。この“ケルックス”という言葉は、単純に『王の伝令』です。王様が命じたことを、そっくりそのまま伝えるということです。ですから、国民が関心を持って聞こうと聞くまいと関係なく伝えるんです。王の伝令、勅令を伝えるわけです。王の威厳をもって伝えるんです。人の顔色を見ながら、弱々しく、聴いてくださいよというような気持ちで伝えるんじゃないんです。堂々と伝えるんです。王の伝令として「王はこう言われる。王はこう命じておられる。これが王のみこころである。」と、堂々と大胆に伝える。これが伝令の役割・務めです。国民がそれを聞こうと聞くまいと関係ないんです。国民の態度がどうだろうと、あなたが語る相手が無関心だろうと、逆にあなたに^{きばむ}牙を剥くような者だろうと、^{かたくな}頑なで拒む者だろうと、関係なくあなたは王の伝令ですから伝えるんです。伝えるべきことを上からの命令として伝えるんです。これは軍隊用語でもあります。上官が言ったことを下士官が誤りなく伝える、正確に伝える。これが大事です。

で、使徒というのは“apostolos”（アポストロス）と言います。これは、単純に『遣わされた者』です。すべての人たちは、キリストに遣わされた者。厳密にはキリストの使徒は12人、12使徒だけですがけれども、現代の使徒は聖霊によって遣わされた使徒であります。私たちはまさに聖霊によって遣わされた“アポストロス”と言って良いと思います。で、単純に遣わされた者ですから、『メッセンジャー』というふうにも訳せます。『使徒』と言うと、使徒的権威、12使徒というイメージを持つと思いますが、実際に『使徒』という言葉は単純に“遣わされた者”、“メッセンジャー”です。イエス・キリストも父なる神から遣わされた『アポストロス』とヘブル人への手紙で言われています。で、キリストが12人の使徒を遣わした『アポストロス』もあれば、聖霊がテモテやテトス、他にもシルワノとかいろんな人たち、聖霊によって『使徒』として呼ばれております。

で、『教師』は“didaskalos”（ディダスカロス）と言います。これは『神の言葉を解き明かす者』。律法の教師に使われる言葉です。皆、同義語でありますけれども、宣伝者は本当にただ宣伝するということです。王の伝令。上からの命令を忠実に正確に伝える。顔色を見ずに。「今はちょっと場違いじゃないかな。空気を読まなければ。」と思うかもしれませんが。「時が良くても悪くてもみことばを宣べ伝えなさい。」王の伝令ならば、時なんてあなたが決めてはいけないんです。王が命じたらあなたは、ただそれを伝えるだけです。今はタイミングが悪いとか、そういうことは伝令の考えることではありません。伝令は、王が伝えよとい

うことをただ伝えるだけです。相手がどうであれです。あなたはいつも遣わされていることも覚えて下さい。クリスチャンとして先ずあなたが先に救われたならば、あなたはその家庭に遣わされているんです。他の家族は皆ノンクリスチャンです。まだ救われていません。であるならば、あなたが先に遣わされたということを覚えて下さい。実家に帰るのは、ただ里帰りするんじゃないんです。実家という宣教地にあなたは遣わされて行くんです。皆さんもそういう立場であるということをいつも意識して下さい。ただ親元に帰るとか、ただ家族で時間を過ごす。そのためにあなたは行くんじゃないんです。使徒として遣わされる。そしてあなたはみことばを解き明かす者でもあります。

で、今度は**8 節**。『**ですから、私は願うのです。男は、怒ったり言い争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい。**』“男”というのは原語では複数形『男たち』、そして文脈上読み進めていくと、この『男たち』というのは、“夫たち”であるということが分かります。クリスチャンの夫たちのこと。ここから言われているのは、クリスチャンの男若しくはクリスチャンの夫の務めであります。『**ですから**』とあります。キリストの宣伝者、福音の宣伝者、使徒であり、また教師。ですから、男は、すべてのクリスチャンの男性は、今の言われている通りの責務ですね。先ずは人について神に語る。そして、神について人に語る。これがクリスチャンの責務です。その中で優先順位としてまず先に人について神に語る。つまり祈るということ。祈ることは勿論すべてのクリスチャンの責務なんですが、とりわけ男性が、クリスチャンの夫が祈ることに於いて先んじなければいけない。クリスチャン女性以上に、クリスチャンの妻以上に、クリスチャンの男性が祈りに於いて専心しなければいけない。男は祈りをリードする立場にあるということです。特に公の場では、教会においてはそうです。家庭でもそうですけれども、男は女よりも祈り深い者でなければいけない。特にリーダーと呼ばれる者は、祈りのリーダーでなければならぬということです。カルバリーチャペルの創始者であり、私の牧師でもあるチャック・スミスは、教会のリーダーを選ぶのには、祈り会に行って男性たちの祈りを聞くそうです。祈る人はリーダーにふさわしいんです。リーダーは先ずは祈りのリーダーでなければいけない。19 世紀、世界最大の教会を牧会していたチャールズ・ハドソン・スポルジョンはこう言っています。「もし天の下に絶えず祈りなさいという教えを実行せざるを得ない人があるとするならば、それは確かに教役者である。」教役者とは、プロテスタントの専門用語で牧師や教会指導者のことを言います。またスポルジョンはこうも言っています。「もし教役者として、(こういう教役者という言葉すら神学校に入学する人たちは知らないと思います。牧会という言葉もしらないわけですから。) 祈り深くないならば、あなたがたは憐れむべき存在である。」牧師として、教会のリーダーとして、祈り深くないならば、憐れむべき存在。クリスチャンの夫、祈り深くないならば。クリスチャンの父親、祈り深くないならば、憐れむべき存在であると。また 20 世紀の最大の説教者の一人 D・M・ロイドジョーンズはこう言っています。「祈りは説教者の生活にとって生死に関わるものです。」生き死にに関わるもの。とりわけクリスチャンの男性リーダーにおいて、祈りがどれだけ重い責務なのかということを言っています。男は祈ることよりも、怒ったり言い争ったりすることの方が好きです。残念ですけれど、これが男性の傾向です。クリスチャン男性でも、祈ることよりも怒ったり言い争ったりすることの方が好きですし、そのことが得意です。男は怒って論争することの方が得意です。“言い争う”という言葉は他にも『論争』とか『疑う』というふうにも訳せる言葉です。男のほう疑問を抱いて、懐疑的になって、すぐに素直に信じようとしなかったり、疑ってみたり、言い争ってみたり、「あーでもない。こーでもない。」と理論的なことばかり言って、そしてブチ切れたり、短気になる。男の特徴です。でも、パウロはテモテに対して『**男は、怒ったり言い争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい。**』きよい手を上げて祈る。これは男にとってチャレンジとなることです。男はむしろ怒って手を上げる。殴るということですね。若しくは拳を上げる。又は手じゃなくて怒声を上げる。怒鳴り声を上げる。こっちの方が男は得意かもしれません。でもそれはきよくない手を上げるということです。むしろ

きよい手を上げて祈ること。これは男にとって大きなチャレンジ。男にとってこれは苦手分野です。男は祈ることよりも、すぐに行動に出ることをします。短気ですから。又、祈ることは非生産的な行為だと思ってしまいます。男は生産性のあること、もっと理論的なことを望みます。でもその男の弱い、男の肉的な傾向をパウロは見抜いて、勿論パウロも男性ですから自らにも自戒の意味を込めて、テモテに対してもこのことを言っているわけです。教会の牧師として先ずは、私たち男性たちはどこでもきよい手を上げて祈るべきである。これが私たちのリードすべきこと、やるべきことであると。『ですから』と。先ずこうすべきだ。私たちもこれまでのメッセージを聴いて、『ですから』自分に当てはめなくてははいけません。ここには男性は私一人なので私にしか言えないんですけども、皆さん女性なのでこの後続きますから期待して下さい。でもこのメッセージを CD やインターネットで聞く男性たちにチャレンジしたいと思います。

『男は、怒ったり言い争ったりすることなく、どこでもきよい手を上げて祈るようにしなさい。』あなたの夫にも伝えて下さい。あなたのお父さんにも伝えて下さい。苦手なことです。男に足りないところ、弱いところ。『どこでも』、直訳は“すべての場所で”です。教会だけでなく、家庭でも、職場でもです。男はついつい人の目を気にして格好をつけたがります。教会ではもしかして手を上げて立派な祈りをささげるかもしれませんが、家ではどうでしょうか。家庭では、職場では。クリスチャンの手前は格好をつけるかもしれませんが。敬虔なクリスチャンに見せるために。熱心なクリスチャンに見せるために、教会ではたいそう立派な祈りをします。でも家ではどうでしょうか。職場ではどうでしょうか。人の目が気になる。同僚にどう思われるか。友達にどう思われるか。ノンクリスチャンの友人たちと一緒にレストランか何かにいっても、人の目を気にして祈らないとか。特に男性はこの点が苦手でありますね。哀歌 3 : 41、預言者エレミヤが書いた歌です。『私たちの手をも心をも天におられる神に向けて上げよう。』手を上げるという行為は実は心を上げるという行為であるわけです。心を上げる。これを象徴的に手を上げることによって、動作によって表現しているわけです。心が下がっている時、私たちは手を上げて心を上げようとするわけです。心が下がっている時、重くなっている時、手を上げてみて下さい。不思議なことが起こります。心を持ち上げる象徴的な行為こそ、この手を上げるという行為です。人の目なんて気にしないで下さい。で、同時にこの手を上げるという行為は、降参する時も手を上げます。降参する時。お手上げですという時。又は万歳。「天皇陛下万歳」じゃなくて、「キリスト陛下万歳」と言う時。現人神はキリストだけです。万歳と言うならキリストに私たちは言うわけです。「ハイル、ヒットラー」じゃなくて、「ハイル、キリスト」です。そのようにして賛美する時も手を上げるわけです。ユダヤ人は賛美する時、祈る時も、手を上げます。栄光を帰す時、自分の心を持ち上げて、主にそれを知って頂きたい。主に私の心を受け取って頂きたい。愛の心を受け取って下さい。この私の重い心を主よ、あなたが受け取ってとりなして下さい。変えて下さい。軽くして下さい。手を上げるわけです。又は小さな子どもが抱っこしてと言う時、お父さんお母さんに手を上げます。そのような素朴な純粋な祈りの姿勢、それが手を上げるという行為です。男性はこういうことが苦手なんです。女性はこういうことが得意です。一般的な傾向で言ってますから、例外的なものもあるでしょうけれども、一般的に男性は手を上げて祈ったり、賛美するのが苦手です。格好つけるからです。人目を気にするからです。興味深いことに私たちが子どもたちに祈りを教える時、頭を垂れて、目を閉じて、腕を組んで祈るように。皆さんもそうやっていつの間にか祈る時、そうしてますね。頭を垂れ、目を閉じ、手を上げるんじゃないくて、手を組んで、そして祈る。それが祈りの姿勢だといつの間にかそう思い込んでいます。そういう固定観念があるかと思います。でも実際のところ、聖書を読むと、必ずしも祈る時に目を閉じなければいけないとも書いていません。必ずしも聖書を読む限り、祈る時には頭を垂れるとか、祈る時には手を組むとか、そのようには聖書には一切祈りの動作として書いてありません。むしろ逆のことしか書いてありません。これはイエスの例で見たいと思います。イエスは祈る時「頭を上げなさい」と言いました。ルカ 21 : 28。『これらのことが起こり始めたなら、からだ

をまっすぐにし、頭を上に上げなさい。贖いが近づいたのです。』またイエスは祈る時、目を天に上げました。天の父に目を上げて祈ったんです。ヨハネ 11：41。『そこで、彼らは石を取りのけた。イエスは目を上げて、言われた。「父よ。わたしの願いを聞いてくださったことを感謝いたします。』またヨハネ 17：1。『イエスはこれらのことを話してから、目を天に向けて、言われた。「父よ。時が来ました。あなたの子があなたの栄光を現すために、子の栄光を現してください。』イエスは目を閉じて祈ったんじゃないくて、目を開けて、目を上げて祈ったと。目を下げるんじゃないくて、目を上げるんです。またイエスは手を上げて祈りました。ルカ 24：50。『それから、イエスは、彼らをベタニヤまで連れて行き、手を上げて祝福された。』私たちの模範は、イエス・キリストであります。特に男性の模範はイエスです。イエスは頭を上げて祈りなさいと言いました。イエスは自身目を上げて祈りました。イエスは手を上げて祈ったんです。なのに私たちは頭を垂れ、目を閉じ、手を組んで祈ります。一体どういうことなんでしょうか。子供には分かりません。なぜならば子供は目を開けているとどうするのでしょうか。キョロキョロします。手を組まないと何をするのでしょうか。あちこちいろんなものを触っていたずらします。集中しないんです。注意散漫になるわけです。子供にとってはそれは一つの訓練として、祈りに集中するためには頭を下げて、目を閉じて、手を組んで、いたずらしないように。子供にはそれでいいかもしれません。でも大人は縛られて祈る必要はないんです。自由にイエスのように祈るべきです。時に私たちは頭を垂れて、目を閉じて祈っているうちに寝てしまうこともあります。眠いのになんていう姿勢をとる必要はありません。眠いんだったら、立って目を開けて歩きながら祈ればいいんです。「車を運転しながら祈れません。危ないです。目を閉じたら。」目を開けても祈れるんです。仕事しながらでも祈れるんです。絶えず祈りなさいとパウロは言いましたけれども、どうやったら絶えず祈れるか。頭を垂れて目を閉じて手を組んでたら、絶えずは祈れません。もう言わんとしていることは分かると思います。私たちは勝手に祈りの姿勢というものを作ってしまってます。それが祈るべき姿勢だと思っているかもしれません。でも聖書では必ずしもそのような私たちが先入観を持って、固定観念を持っている祈りの姿勢を指示しているのではないということです。そういうふうには子供には効果があるかもしれませんが、でもむしろ祈りの姿勢は自由です。動作、所作、姿勢、格好は聖書の中から教えられてます。それを私たちは心掛ける必要があります。姿勢とか所作、格好、それが大事だと言っているのではありません。そうじゃなくて、縛られずに自由に祈り、心の表現として表すのが大事だと言っているんです。「頭を垂れて目を閉じて手を組んで祈る、その祈りがふさわしい祈りとなる。そういうふうには祈らなければ神はきいてくれない。目を開けて祈るなんてとんでもない。手を上げて祈るなんてとんでもない。」そう思っていたならば大きな間違いだと言うことです。祈る時に目を開けているのは不謹慎だと言う人もいますけれども、そうじゃないんです。子供は目を閉じたほうがいいのかもありません。子供は手を上げない方がいいかもしれません。でも大人はそうじゃないでしょう。大人がそうだったら困ります。そのことも考えて頂きたいと思います。イエス・キリストが模範だと言いましたが、イエスは十字架の上で手を上げて祈ったんです。手を上げてまま祈ったんです。父よ、彼らをお許し下さい。彼らは何をしているのか自分でわからないのです。とりなしをしたんです。自分を十字架にはりつけにしたその人たちのために、彼らが救われるよう。あなたを侮辱し、あなたに唾きをかけ、あなたを痛めつけ、あなたを馬鹿にし、あなたを傷つけ、あなたを迫害する者のために、私たちもイエスの模範に倣って手を上げて祈るべきです。「父よ。彼らをお赦しください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」ネロのために。この国の首相のために。あなたの上司のために。何をしているのかわからなくてもです。あなたに悪いことしか言わない、やらない、そういう人たちのためにもです。あなたのお父さん、夫のためにもです。何をしているのかわからないんです。手を上げてとりなしてあげる必要があります。

で、9 節に『同じように女も』『同じように』大事な言葉ですね。“女”は複数形です。文脈上“男たち”が夫であったように、ここでの“女たち”は妻であります。クリスチャンの女性に対しての言葉です。

でもなぜか女性たちには、「手を上げて祈れ」とは命じられていません。というのは、彼女たちにとってこれは命令されるまでもないことです。女性たちは手を上げて祈ることに躊躇しません。自然に出来ることですね。自然に出来ないならば、男に与えられている命令を自分に対する命令として行って頂きたいと思います。”同じように”ですから。男たちだけがきよい手を上げて祈るんじゃないです。女性たちもまたきよい手を上げて祈る。それは命じられていること。同じように言われていること。でも敢えて女性にこれが言われなくても、指摘されなくても、それが男と違ってし易い。自然に出来るということですね。女性の方が情緒豊かです。感情表現が豊かです。男は中々体の所作でそれを表すことが出来ません。女性は子供に手を伸ばしたり、子供を抱きしめたり、体をもってボディーランゲージが得意であります。でも男は苦手ですね。子供に中々そのように表現出来ません。で、続きを見たいと思います。『同じように女も』その代わりに女性にとってこれはチャレンジとなること。苦手な分野と言っていると思います。『つつましい身なりで、控えめに慎み深く身を飾り、はでな髪形の形とか、金や真珠や高価な衣服によってではなく、』

10 節『むしろ、神を敬うと言っている女にふさわしく、良い行いを自分の飾りとしなさい。』女性の見た目ですね。外見ということです。これに注意を払うようにということなのですが、“飾り”という言葉、“飾る”という言葉。これは”kosmeos”（コスメオス）というギリシャ語です。英語のコスメティックの語源です。で、それからして、ある人たちは「クリスチャンの女性はコスメティックを、メイクアップを、化粧をしてはいけないんじゃないですか。」と。ある教会では「女性は一切化粧をしてはいけない。女性は一切装飾品を身に着けてはいけない。地味な格好をして、決して華やかな美しい格好をしてはいけない。むしろみすぼらしい、貧乏くさい、トーンの暗い、そういう衣服を身に着けなきゃいけない。黒を着なければいけない。」とか、「化粧をしてはいけない。ネックレスだとかピアスだとかとんでもない。」と。指輪なんかつけちゃいけないと。髪飾りなんかもってのほか。髪型なんか全然もうみんなオカッパみたいな頭でとかですね、そういうようなことを実際に勧めている、命じているような教会も世の中にはあります。髪の毛を染めるなんてとんでもないと。そういうことをここで言っているんでしょうか。そうじゃありません。アメリカの有名な牧師で又ラジオ伝道者でもあった、もう天に召された人ですが、J・バーノン・マッキーという人がおります。私が尊敬している牧師の一人です。彼が、聖書講解の名手でもあります。その彼がこういうことを言っています。質問されたんですね。ある集会で「クリスチャンの女性は化粧をすべきでしょうか。すべきでないでしょうか。」J・バーノン・マッキーはこう答えるそうです。これは名答です。「もし物置小屋がペンキを塗る必要があるならば、あなたがたも塗れ。」と。物置小屋にペンキを塗る必要があるならば、それで物置小屋が美しくなるならば、あなた方も塗れと。“塗れ”というのは勿論ペンキじゃなくて、化粧を塗りたくれと言っているわけです。その通りだと思います。ペンキを塗って美しく見えるならば、女性もそうすべきだと。その通りだと思います。確かに聖書には「神は人の心を見る」と。逆に「人はうわべを見る」と。でも、人はうわべを見るんです。神は心を見ますが、ひとはあなたのうわべ、外見を見るんです。外見を美しくすること自体、悪いことじゃありません。歯を磨いて、顔を洗って、シャワーを浴びて、お風呂に入って、身綺麗にして、洗濯をした服を来て、やって来る。それは常識です。それはエチケットです。それは最低限の礼儀です。愛は礼儀に反することをしないんです。でも、神は心を見るから、別に歯なんか磨かなくてもいい、顔なんか洗わなくてもいい、お風呂なんかはいらなくてもいい、服なんて着替えなくてもいい、寝間着のままでいいとか。とんでもないです。人はあなたのうわべ、外見を見るんです。人はあなたの隣に座らなきゃいけないんです。臭うんです。きれいにしなきゃいけないわけですね。ですから、それはもちろん節度があるもの。『つつましい』という言葉が使われています。若しくは『控えめ』という言葉が使われていますから、バランスが必要です。美しくする必要は確かにありますけれども、それも度を越してはいけない。“控えめ”という言葉は、『自ら進んで自由を制限する』というニュアンスの言葉ですから、派手な格好も出来るんです。ブランド物を身に着けて、いろん

な装飾品を身に着けて、分厚い色濃い化粧をすることも出来ます。髪の毛も派手な色に染めることも出来ます。派手な髪型をすることも出来ます。でも、それを敢えて控えめに、敢えて節度のある、そうする自由があっても敢えてそれをしない。当時エペソの教会においては、おそらくそこにはアルテミス神殿という豊穡の女神・セックスの女神が祀^{まつ}られているそういう神殿がありましたから、そこには神殿娼婦が数千人もいて、町に繰り出して男たちを誘惑していたわけです。男を魅了するようなファッションが流行っていたと思われます。教会にもそういうファッションを真似て来る人たちもあつたと思います。肌を露出した格好。男を惹くような、目立つような格好。でも、パウロはそんな女性たちに対して「あなたがたはそのような外見で自分たちを飾ってアピールしてはいけない」と。最新の流行だろうと、ミニ・スカートが流行ってるからとか、肌の露出が流行ってるから、透け透けの服が流行ってるから、下着を敢えて見せるような服が流行ってるから、それを着ていいと言っているではありません。もちろん自由はありますけれども、それでも男性クリスチャンのつまづきになるならば、それが性的な誘惑につながるならば、そういう服を着る自由もありますけれども、それを着ない愛というものがあると。服装は内面を表すとも言います。人は見かけによらないという言い方もありますけれども、でも実際のところやっぱり服装というのはその人の内側を表すものでもあります。一つ一つ化粧品にしても、髪型にしても、服装にしても、装飾品にしても、よくよく吟味して頂きたいと思います。何を身に着けても、どんな格好をしても、それはあなたの自由ですけれども、でも教会に来る時、あなたに自由があっても、愛によって敢えてそれを抑制し、つまづきを与えない。むしろ、あなたは神の栄光を表すために自由が与えられているということを覚えて頂きたいと思います。箴言 11 : 22 にはこう書いてあります。『美しいが、たしなみのない女は、金の輪が豚の鼻にあるようだ。』また箴言 31 : 30 もお読みします。『麗しさはいつわり。美しさはむなし。しかし、主を恐れる女はほめたたえられる。』女性たちにこのことを考えて頂きたいと思います。是非、外面の美しさを目指すよりも、内面の美しさを目指すと思います。もちろん最低限のエチケット、礼儀として綺麗に身を整える、つつましい、節度のある格好で、自分に注意を惹くんじゃなくて、男たちの目を惹くんじゃなくて、自分が綺麗な人と思われるそのことを求めるんじゃない、むしろ自分の内に住むキリストが美しい。自分に関心を惹こうとするんじゃない、自分の内にいるキリストに関心が向くように、キリストに関心を持ってもらえるように。女性たちはつつましい外見から自分に関心を持ってもらいたいと思います。結婚しているならば、夫にそう思われるのは良いと思います。美容院に行っても夫は全然気付いてくれない、ショックですね、悲しいです。全然私のことなんか見てくれない、関心なんか持ってくれない、そうあつてはいけません。でも、夫以外の者に、もし関心を持ってもらおうなんて思ってるならば、それは不健全です。不謹慎です。私たちはその辺を気を付けなくてはいけません。もちろん女性だけじゃなくて、男性も然りということも伝えておきたいと思います。

そして 10 節『むしろ、神を敬うと言っている女にふさわしく、良い行いを自分の飾りとしなさい。』アピールするならば、良い行いを。良い行いが私たちの美しさとならなければいけない。具体的に女性の“良い行い”とは、第 1 テモテ 5 : 14 に書いてあります。『ですから、私が願うのは、若いやもめは結婚し、子どもを産み、家庭を治め、反対者にそしる機会を与えないことです。』こういったことは女性が行える良い行いです。女性の弱さとして、良い教えを聞きたがるんです。良い教えばかりを求めたがるんです。でも、その一方で良い行いは後回し。なおざりにされてしまう。良い教えばかり求めて、良い行いが伴わない。ですから皆さん夫から言われるわけです。「水曜日も、金曜日も、日曜日も聖書を学んでいるのに、一体何なんだと。どうしたんだと。何のために聖書を学んでいるんだと。」よく言われると思います。でも、それは女性の弱さです。あなただけじゃないから心配しないで下さい。あなたの隣の女性もそうだと思います。後ろの女性もそう言われると思います。「そんなに一生懸命、熱心に聖書を学んでいるのに、一体何だ。これは」と。良い行いが伴ってないわけです。良い教えばかり求めて、良い行いが伴わない。すなわ

ち教理と実践・実行が切り離されてしまう、そういう傾向が女性クリスチャンに多いと思います。

で、**11 節**。以降を読んで頂くとパウロはいかに、あたかも女性を差別しているかのようなことを教えていると感じてしまう、誤解を生むところです。聖書の中でも難解な箇所に入るところです。理解が難しいところです。『**女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。**』直訳は『すべて従う心をもって教えを受けなさい。』“よく従う”ではなくて、“すべて従う”。そういう姿勢が問われています。もちろん聖書に反しない限りという但し書きがあります。「人に従うよりも神に従うべきだ」と言われていますから、聖書的な信仰に抵触しない限りすべて従う心が大事です。

12 節。『私は、女が教えたり男を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。』「これでは女性差別です。女性を蔑視しているようですと、オールドファッションです。今の時代にはそぐいません。」と思うかもしれません。**13 節**。『**アダムが初めに造られ、次にエバが造られたからです。**』理由はここに 있습니다。**14 節**。『また、アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました。』これが理由です。**15 節**。『しかし、女が憤みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、子を産むことによって救われます。』「何ですか、これはと。子供を産める人はいいかもしれない。産めない人はどうなんですか。独身女性はどうなんですか。」いろんな理解・解釈があります。難解とされる箇所です。

先ずパウロは女性差別をしてはいないということから指摘したいと思います。当時のユダヤ人男性の祈り、毎日の祈りはこうでした。『神様、私が異邦人にも犬にも女にも造られなかったことを感謝します。』『女に生まれなかったことを感謝します。』というのが当時のユダヤ人男性の祈りでした。すなわち男からして女というのは、異邦人・異教徒・犬と一緒にだ。完全に女性差別、蔑視、男尊女卑です。またユダヤ教のタルムードという聖典には『誰でも自分の娘にトーラー（すなわち律法）を教える者は、淫らなことを、好色を教えている。』と書いてます。女性が聖書を学ぶという機会はなかったということです。さらに『女は年少の子供にすら教えてはいけない。』この“教えてはいけない”というのは、聖書を教えてはいけないと。年少の子供、自分の息子にも孫にも教えてはいけないと言っているわけです。当時のユダヤ教の社会では、女は聖書を学んでもいけないし、一切教えてはいけない。その中でパウロは何と言っているのでしょうか。**第1テモテ 2:11**のところでは『女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。』と言っています。教えを受けて良いんだと。学んで良いんだと。パウロは**ガラテヤ 3:28**では、『ユダヤ人もギリシヤ人もなく、奴隷も自由人もなく、男子も女子もありません。』男女差別なんてものは教会にあってはいけないということを言っています。また実際にテモテのお母さんのユニケ、おばあちゃんのロイス、彼女たちはテモテに聖書を教えたんです。これは**第2テモテ 1:5**。（私はあなたの純粋な信仰を思い起こしています。そのような信仰は、最初あなたの祖母ロイスと、あなたの母ユニケのうちに宿ったものですが、それがあなたのうちにも宿っていることを、私は確信しています。）また**第2テモテ 3:15**。（また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。）パウロはそのことを賞賛しています。テモテが女性たちから、自分の母、自分の祖母から聖書を幼いころから学んできたことを、素晴らしいと認めて、賞賛し、そのことを奨励しています。またパウロの同労者一人にプリスキラという女性がいます。プリスカとも言います。**使徒 18:24~26**。メモだけして下さい。彼女と夫のアクラは、アポロという律法学者に基督教の“いろは”を教えたんです。女性も指導できるんです。夫と一緒にならば。またローマ教会にも沢山の女性のリーダー格がいました。**ローマ 16 章**にその名前が散見されます。例えば、フィベという女性。マリヤ、イエスの母ではありません、別のマリヤです。そして、ツルパナ、ツルポサ姉妹。また、ペルシスという女性。また他にはピリピ教会にはユウオデヤとスントケという女性信徒も聖書を教える者として置かれていたということが示唆されています。**ピリピ 4:23**。むしろそうした箇所から分かる通りパウロは女性たちに教えを受けなさいと言うばかりか、女性たちから教えも受けなさいと、教えな

さいとも言っているわけです。テトス 2 : 3~5 が女性が教えるということがどういうことか、パウロによって教えられてます。『³同じように、年をとった婦人たちには、神に仕えている者らしく敬虔にふるまい、悪口を言わず、大酒のとりこにならず、良いことを教える者であるように。⁴そうすれば、彼女たちは、若い婦人たちに向かって、夫を愛し、子どもを愛し、⁵慎み深く、貞潔で、家事に励み、優しく、自分の夫に従順であるようにと、さとすことができるのです。それは、神のことばがそしられるようなことのないためです。』このようにして、年をとった年長の婦人は、年配者の婦人は、熟練したクリスチャンの女性は、未熟な若いクリスチャン女性に教えることが出来る。むしろ、そうすべきだと。但し、ここで見て分かる通り、女性が教えるという時、それは教理や神学を教えるというよりも、聖書の御言葉を教えるというよりも、むしろ聖書の御言葉をシェアしながら、分かち合いながら、教理よりもむしろ実践を教えています。実践を勧めているわけです。妻として、母として、子育てとか、家事について。夫に従順になることを教えたり。教理じゃなくて生活について教えているわけです。指導しているということです。御言葉はもちろんシェアしますが、御言葉を体系的に、教理的に、神学的に教えるということはしておりません。こういうことも皆さんに考えて頂きたいと思います。

で、テキストに戻って頂いて第 1 テモテ 2 : 11。『**女は、静かにして、よく従う心をもって教えを受けなさい。**』“**静かにして**”というのはギリシャ語で“hesuchia”（ヘースヒア）といいます。“ヘースヒア”これは、『落ち着く、平穩、かき乱されない』という意味ですけれども、他にも『家にとどまって、家事にいそしんで、他人のおせっかいをやかない。』『むやみやたらに干渉しない。』『不注意にいじくり回さない。』というのが、この“ヘースヒア”という言葉です。もちろんすべての女性が専業主婦にならなければいけないと、私は言っているのではありません。家庭の事情で、経済的な事情で、妻が、母親が働かなければいけない、そういうケースもあるでしょう。でも、妻の、母の本分は、家にいて家事をするということです。これは聖書で言われている女性像です。基本は、なるべく家にいて、なるべく子どもたちと時間を過ごして、そして家事にいそしむ。家事をおろそかにしてまでも、子どもたちとの時間を犠牲にしてまでも、外で働かなければいけない。それはあってはいけません。経済的にそれが許されないという人もあるかもしれませんが、そうであったとしても最低限、給料が多少少なくても、子どもたちとちゃんと時間が過ごせるように、家事をちゃんとこなせるように、仕事を選ばなくてはいけません。時間帯も選ばなきゃいけません。この位の努力をクリスチャンはしなければいけないということです。女性はですね。でも、むやみやたらに他人のことに首を突っ込んで干渉する、ゴシップをする、噂話をする。「あの人はこう言っていた。あんなことやった。」とか。女性たちの弱さですね。むしろ静かにしなさいと。“ヘースヒア”です。「教会で妻は黙れ」と言っているのではなくて、「首を突っ込むな」と言っているわけです。「やたらめったら騒ぎ立てるな」ということです。日本語で“おとなしい”という言葉があります。“おとなしい”というのは、ただ『物静か』という意味ではありません。“おとなしい”というのは漢字で『大人 しい』と書くんです。忘れてはいけません。『大人 しい』です。大人らしく。これが“物静か”ということです。騒ぎ立てる女性は、大人しくない。すなわち、子供じみている。ガキだと言っているわけです。勘違いしてはいけません。第 1 コリント 11 : 5。（しかし、女が、祈りや預言をするとき、頭にかぶり物を着けていなかったら、自分の頭をはずかしめることになります。それは髪をそっているのと全く同じことだからです。）教会で女性たちは、ただ口にチャックと言ってるんじゃないで、ちゃんと秩序をもってするならば、公の場でも預言をしたり祈ることも出来ると。ある教会では「女性は公の場では祈ってはいけない」と教えます。それは聖書読みの聖書知らずです。「祈れるのは男性だけ。教会でお祈りできるのは男性だけ。教会で御言葉を語れるのは男性だけ。」そうじゃありません。ちゃんと聖書を読んでみて下さい。そこには、ちゃんと秩序があるならば、男性のリーダーシップ・権威があるならば、女性も祈っていいし、女性も預言もしていいと書いてます。預言というのは、神の言葉を預かって語ることです。で、『従う』とい

う言葉。第1テモテ2:11の『従う心』の“従う”。これは“hupotage”（フポタゲー）という言葉。『適切な秩序を持つ』というのがその意味です。特にこれは夫婦の関係で、適切な秩序を持つということです。夫との関係において、神の創造の秩序というものを意識する。『よく従う』は“すべてにおいて従う”。神が定められた秩序に従うということです。夫のわがままに従うという意味じゃないです。神の定めに従うということです。神が先にアダムを造り、その次にエバを造ったんです。この秩序にすべて従いなさいということです。これも誤解しないで下さい。何でもかんでも夫の言いなりにならなければいけないという意味じゃありません。で、12節の『教える』これは“didasko”（ディダスコ）という言葉。教師という言葉がここから出ています。“権威をもって継続的に教える”というニュアンスの言葉です。女性はそうあってはいけないということです。女性は、男性の権威の下、時折教えることはOKです。でも自分が権威を持って、自分が継続的に教える。これはNGです。マタイ28:15（そこで、彼らは金をもらって、指図されたとおりにした。それで、この話が広くユダヤ人の間に広まって今日に及んでいる。）では、この“ディダスコ”という言葉は、『指図する』という言葉で訳されています。女性が男に代わって指図するということは、あってはいけないということです。男性の、特に夫の権威を侵害してまでも、妻が指図する。これはいけないことです。非聖書的なことです。“ディダスコ”は、特に『権威を持って従わせるように教える』という言葉なんです。ただ「道を教える」とか、そういうレベルじゃないんです。権威を持って従わせるように教えることが“ディダスコ”です。これは、妻には許されていないことです。チャールズ・ハットン・スポルジョンも、『女性が教会で公に教えることは非聖書的なことだ』と明言しています。これは、女性の教職者、女性の牧師を否定することでもあります。これを言うと多くの教会を敵に回すことになりますけれども、でもこのことについて私はブログに書いています。もし、女性牧師が聖書的かどうか知りたい方は、ブログから探してみてください。そこに詳しく書いてます。結論から言うと、聖書は女性牧師を支持していないということです。女性の羊飼いですということです。ラケルは女性の羊飼いでしたが、でもそれはあくまでアシスタントです。彼女は羊に水を飲ませるために井戸の蓋すらどけることが出来なかったんです。女性は非力なんです。女性が狼と戦うことが出来るでしょうか。女性が熊と戦うことが出来るでしょうか。女性がライオンと戦うことが出来るでしょうか。女性が強盗・野盗から羊たちを守ることが出来るでしょうか。無理です。これは男の仕事です。男が不甲斐ないから、女性が、羊のことがかわいそうなので、それを買って出ているだけで、不本意なんです。本当はそれはプレッシャーなんです。それは荷が重すぎるんです。女性牧師たちにとって、教会で牧会するということは荷が重すぎること。男が不甲斐ないからです。ですから私はいつも申し訳なく思います。女性牧師を見る度に心が痛みます。男が情けないから、彼女たちが立っているだけです。でもそれは本来、非聖書的なことですから、あってはならないことです。で、第1テモテ2:12に“支配する”という言葉が使われています。「妻が教えて、夫を支配したりすることを許しません。ただ、静かにしていなさい。」“支配する”という言葉はギリシャ語で“authenteo”（オーセンテオ）と言います。興味深い言葉で“オートス”という言葉と“エンティア”という言葉から成り立っていて、“オートス”は『自分自身』、“エンティア”は『武器、武装』という言葉です。従ってこの“オーセンテオ”という言葉は、原意として『自らを殺人者に任命する』という意味です。『自らを殺人者に任命する』とはどういうことか。殺す権威を持つ。これは生殺与奪の権威を持つ。すなわち支配者ということです。支配するというのは、生かすも殺すも我が手にあるという最高権力者のことを言います。妻が支配するということは、妻が生かすも殺すも自由にする。最高権力者になるという意味です。自分の権威や力を振るう人。すなわち独裁者、専制君主、専横な人、これを指す言葉です。妻が夫を支配するということは、ここで直訳すると妻が自分の夫を殺害して夫の権威を強奪するという行為です。“教える”と“支配する”は不可分な関係にあります。恐ろしいですね。あなたが夫を教え、夫を支配するのは、夫を殺すという意味です。

で、“**静かにする**”という言葉は、**11 節**と繰り返し使われています。繰り返し使われているということは、余程強調されている。妻は余程うるさい、騒がしいということです。クリスチャン女性に言われていることです。

で、**13 節**で『**アダムが初めに造られ、次にエバが造られたからです。**』と。妻が夫に従う理由が挙げられています。これは神が定めた創造の秩序に従うことが根本になっています。「むやみやたらに夫に盲従しなさい。夫の言いなりになれ。ロボットになれ。はしためになれ。」という意味ではありません。男女とも神のかたちで造られていますから、夫婦同権です。ただ夫が先に造られたので、家長として神がデザインされたわけです。妻は夫の助け手として、ヘルパーとして造られたわけです。講解説教の名手でマシュー・ヘンリーという人はこう言っています。創世記の注解書で「エバはアダムの上に立つようにとアダムの頭の一部から造られなかったし、彼をつまづかせるために彼の足から造られたのでもなかった。そうではなく、彼と等しい者として彼の脇腹から、彼によって守られるべく彼の腕の下から、彼に愛される者となるべく彼の心臓の傍から取り出され、造られた。」とコメントしています。素晴らしいコメントだと思います。男女二人は互いに助け合って、補い合っする相互補完の関係にあるということです。男にも足りないところがあり、女にも足りないところがある。それをお互いに補い合う。相互補完の関係にあると。それが一心同体の夫婦のあり方です。夫が妻を愛し、妻は夫に従う。これが自然なわけです。そうやって神の秩序、調和が保たれるわけです。夫婦関係は支配と隷属の関係にあるものではありません。愛と従順の関係にあるわけです。それはキリストと教会の関係にも重ねられています。夫とキリスト、妻と教会。これは反映されるべき関係としてパウロがエペソの5章で訴えております。

で、14 節のところで『**また、アダムは惑わされなかったが、女は惑わされてしまい、あやまちを犯しました。**』とあります。妻が夫に権威を振るって教えてはいけないという、禁止の理由が書かれています。それは、女が男よりも誘惑されやすいという意味じゃないんです。**創世記 3 : 16~17**に、罪の結果に対する神の宣告において、妻は、エバは蛇の声に聞き従ったとあります。夫は逆に妻の声に聞き従ったとあります。蛇は夫を誘惑できないことを知っていました。サタンはアダムを誘惑できないことを知っていたんです。だから妻を、エバを蛇は誘惑したわけです。この蛇の誘惑というのは、**創世記 3 : 5**にあるように「あなたの目が開かれて、あなたは神のようになれます。で、あなたは死ぬことがないですよ。永遠に生きることができますよ。」といった誘惑でした。サタンはエバに対して「酒を浴びるほど飲もうじゃないか」とか、「麻薬を気を失うまで打とうじゃないか」とか、「乱交パーティー、乱痴気騒ぎをしようじゃないか」なんていう誘惑はしなかったんです。エバに対して「あなたの目が開かれ、善悪をあなたは自分で見分け、あなたは神のように何でも自分で正しいことを選び行うことが出来るようになる。そしてあなたは死なない。永遠に生きることができる。」非常に霊的で、道徳的で、むしろ健全な誘惑と言っても良いかもしれません。エバに対する、妻に対する誘惑は、「霊的になりますよ。敬虔になりますよ。神のようになりますよ。」という誘惑でした。この誘惑は、霊的になれるというものは、非常に厄介なものでありまして、2 つの側面を持っています。一つは“霊的になる”というのは、最高権威、最高権力を求めるという側面があるということです。“神のようになる”ということは、神のように何でも生殺与奪の権威を持って、何でも自分の好きなように決めることが出来るという側面があるわけです。その一方で、道徳的に、倫理的に、きよく正しく敬虔に信仰深く生きることが出来る。その二面性があるわけです。ですから誘惑になると、その前者のほうに肉に訴えてくるわけです。折角、神のようになりたいと思っていたのに。折角、神をもっと知りたい。もっと御言葉を学びたい。もっとキリストの似姿に変えられたい。永遠に生きたい。折角、そういう純粋な思いも。この誘惑は二面性があるわけです。それは同時に自分が最高権威者になる。神の次が夫で、妻であるという、その中で妻が一番下なわけです。神、夫、妻ですね。当然一番下にいるわけですから、妻は上に立つ権威・権力に憧れるわけです。自分にはないものに憧れるわけです。**創世記 3 : 16**に

は“恋慕”という言葉が使われていますけれども、この“恋慕”という言葉は、直訳すると『強く願う』。健全な意味で使われているとは限りません。文脈で罪の結果に対する神の宣告であることを踏まえる必要があります。“恋慕”というのは、むしろ『夫にとって代わろうとする。』権力を欲しているということです。同じ言葉が**創世記 4:7**にも使われています。そこは文脈上、弟のアベルを殺したカインが、罪が支配するということを強く望んでいるところです。ですから妻は夫を恋慕うじゃなくて、妻は夫を支配したいと強く願うというのが**創世記 3:16**の直訳です。文脈を意識した適訳となろうと思います。妻は支配権を握ろうと強く願う。しかし、逆に夫はあなたを支配することになる。これが神の呪いの宣告だったわけです。夫婦関係が愛と従順の関係から、支配と隷属の関係になってしまったのは、罪の結果であるということです。アダムは妻の声に聞き従ったとあります。つまりエバがアダムの教師となって、蛇のメッセージを夫に教えたということです。その結果、神の創造の秩序は破壊されたわけです。女の罪の性質は、始めは“霊的になりたい”という純粋な動機だったんですが、次第にそれが“支配したい”というものになっていったわけです。霊的になりたいと願っちゃいけないじゃないです。夫の権威に従うならば、妻は最高に霊的になれるということです。夫の権威に従わずに霊的になろうとすることが、危険だということです。皆さんにこのことを強く言っておきたいと思います。あなたの夫はあなたよりも聖書は知らないかもしれません。あなたと同じようにはバイブルスタディーに出席したり、日々聖書を開いて学ぶということは、あなたの夫はしないかもしれません。でもあなたは好んで聖書を学びます。時間さえあれば聖書を読みます。でも夫の権威に従わずにそれを続けるならば、エバと同じような誘惑の危険が、惑わしの危険があなたにも迫っているということを知って下さい。あなたもまた、夫を殺してまでして夫を支配しようとする、サタンの誘惑に陥ってしまうということです。それはハッキリと罪だと聖書は言っています。アダムは惑わされなかった。それは単純に愚か者だったからです。鈍かったからです。優れていないんじゃないです。霊的に鈍感だっただけです。アダムは“惑わされた・騙された”のではなくて、アダムは分かっていたんです。知っていて罪を犯したんです。エバは知らずに惑わされて罪を犯したんです。だから人間が墮落した責任の追求は、エバじゃなくてアダムに、**ローマ 5:12~21**に責任はアダムにあると言われています。でもアダムはそれを妻に責任転嫁しようとしたわけです。「あなたが私に与えたこの女が、私を騙した。そそのかしたんです」と。それは責任転嫁、罪です。エバは知らずに惑わされて罪を犯しましたが、アダムは分かっている罪を犯したわけです。その責任は重いわけです。このことを私たちもしっかりと踏まえていかなくてははいけません。

これで、時間が来てしまったので終わりたいと思いますけれども、最後の**15節**のところは、一番厄介だと思われるところですが、ただこれもしっかり見て頂くと、文脈から判断して頂くと、間違いのない正しい正確な解釈が出来ると思います。**15節**のところに『しかし、女が（とありますが、これはもちろん複数形で、“彼女らが”）**慎みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、子を**（“子”というのは単数形です。その前に“彼女が”という単数形の“女”が出てきて。一人の女が一人の子を）**産むことによって救われます。**』というのが原語です。『しかし、女が、女たちが、妻たちが、慎みをもって、信仰と愛と聖さとを保つなら、一人の女が一人の子を、特に息子を産むことによって救われます。』と。正確には“救われることになる”と訳せます。**第1テモテ 1:15**にもこの“救われる”という言葉が使われています。イエス・キリストが罪人を救うと言う時に使われています。**4章16節**にも、これは牧師若しくは聖書を教える者が自分自身に気をつけるようにして、そして自分自身をも、あなたの教えを聞く人たちをも救うことになる。この“救い”というところにも使われています。これで何となく分かったと思いますね。妻たちは、信仰と愛と聖さとを保つ。それが勧められていることです。で、彼女たちは、一人の女マリヤが、一人の息子イエス・キリストを産むことによって、メシヤによって、救い主によって救われるということです。これが第一義的な解釈です。で、他にもただイエスによって救われるというだけじゃなくて、ここでは夫婦の

関係はキリストと教会の関係にも当てられていますから、他にも豊かな適用が出来ると思います。実際に女性たちもまた子を産むことによって救われる。子育てによって女性たちは満たされる。家事にいそしむことによって本当の満たしが得られる。女性たちは心の満たしを求めて、趣味に走ろうとする。家事をして、子育てをしていくよりも、むしろキャリアアップをしよう、外に仕事に出て心を満たそうとする。又は教会で奉仕をして、教会でリーダーになることによって心を満たそうとする。でも本来の女性の本質・あり方は、家にいて家事をして、妻として母としての務めを果たす。子育てをすること。これが本来の満たしとなります。もちろん独身女性、子供を産めない女性もあります。そういう女性たちも聖書の中に登場し、彼女たちも特別に用いられていることは確かです。でもこれは一般論として女性たちは結婚し、子供を産み、子供を育てる。それが本分であります。さっきも言ったように、家庭の事情で、経済事情で、どうしても女性が、妻が働かなければいけない。母親が働かなければいけないケースもあるでしょうけれども、それにしてもです。極力努力をする。家でどの時間、子どもたちとの時間を多く取る。趣味なんかやっている場合じゃありません。趣味を持てはいけないと言ってるんじゃないじゃありません。優先順位をわきまえなさいと言っているんです。キャリアアップを望む人たち。子どもたちはなおざりにされます。必ず後悔すると思います。仕事にばかりのめり込んで、かかり合って、家計のためと言いながら、家族のためと言いながら、高い服を買わなければいけません。付き合いがあります。働けど働けどお金が貯まらないのは何故でしょうか。働きに行くためにはお金がかかるんです。髪の毛もセットしなきゃいけないんです。化粧品も高いのを使わなきゃいけないんです。服も汚い服は駄目なんです。付き合いも増えます。どんどんお金が減っていくんです。こんなに出費があるんだったら、下手に働かないほうが良いと思う位ですね。下手に働くと今度は税金もかかってくるわけです。ですからその辺はちゃんと考えながらするように。働くストレスが溜まりますから、今度は趣味をしなきゃやっていけないということになりますね。負のスパイラル、悪循環です。ですから是非女性たちは自分の本分をわきまえて、そして子を産むことによって。これは男性にも言えることです。私は男ですけども、私は“女”でもあるんです。とんでもないことを牧師は言っていると思うかもしれませんが、「私はゲイだ」といつているわけじゃありません。そうじゃなくて、もう分かっていると思います。すべてのクリスチャンはキリストの花嫁なんです。男も女もある意味で花嫁ですから、男も“女”と言えるんです。私たちは子を産むことによって救われるんです。子を産むことによって本当に満たされる、満足する、喜ぶんです。花嫁が子を産むとはどういうことでしょうか。キリストへ導くということです。あなたは最近誰かをイエス・キリストに導いたことがあるでしょうか。救いに導いたことがあるでしょうか。それが“子を産む”ということです。その“子を産むこと”がクリスチャンにとって一番の喜びです。天に大歓声が上がります。一人の人が悔い改めるならば、御使いたちも大合唱して、大喜びします。何故クリスチャンなのに喜びが無いんですか。あなたはいつイエス・キリストを誰かに伝えたでしょうか。それはいつ頃の話でしょうか。去年に友達に伝えたことがありますとか。十年前にはイエス・キリストに導いたという経験があります。でも今はどうでしょうか。今何故そうしないんですか。どうしてあなたが子供を産もうとしないんでしょうか。是非そのようにして適用はいくらでも出来るということです。解釈はいくらでもあるわけじゃありません。第一義的には、イエス・キリストが救い主として生まれて下さることが、私たちの救いとなること。これは譲れないところですけれども、ただそこから適用はいくらでも出来るということです。豊かに出来るということです。女性ならではの適用。またキリストの花嫁として、教会としての適用。そこを皆さんもそれぞれ当てはめて頂きたいと思います。

男性は弱いところがありますけれども。愚かなところがありますけれども、その分すぐには飛びつかない。疑い深いので、慎重なので簡単には惑わされません。でもその分頑な、鈍いというところがあります。

女性は情緒豊かで、感情的で、手を上げて祈ったり賛美したり、もっと霊的になりたいといういつもそういう健全な建設的な願いを持っています。でもその反面、弱さも、惑わされやすい、自分が仕切りたい、

自分がリードしたい、夫が情けないから仕方がないと思うかもしれません。教会の男性たちが何もやらないから、言わないから、やらないから、ついつい女性たちが。

お互いに私たちは足りないところ、欠けているところを補い合うようにして、ここに集められたということ覚えて、立場をわきまえて、教会の秩序、それは創造の秩序であります。神に従うように、王の王、主の主に従うように。この神の言葉に沿って歩むように。女性牧師は非聖書的です。女性のリーダーよりも男性のリーダーが必要とされています。女性のリーダーは女性を指導すべきであります。女性が男性を支配して教えるということは、これは教会の秩序を乱すこと。で、残念ながら日本の教会は沢山の女性牧師を輩出しています。だから私は日本の宣教が進まないと思っています。教会が弱いのは女性の牧師が多いからです。世界的に見ても類を見ないほどです。明治から存在していたんです。明治の時代、アメリカに女性牧師はほとんどいませんでした。なのに日本からは大勢の女性牧師が今も排出されてます。何故なのか。男性が不甲斐ないから。そして、女性たちはエバの誘惑に陥っているからであります。気を付けたいと思います。では、続きとして3章からまた『教会とそのメンバー』ということで、このメンバーの中には様々な召し、賜物、役割、約束があるということ。それもしっかり聖書に沿って私たちが理解して実行するならば、教会はますます祝福され、教会はますます成長し、発展し、反映するということです。そのこともまた次回見たいと思います。